

# 天衣のお兄ちゃんの話

久遠\_

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

天衣に近しい肉親が居れば、寂しい思いをしなくて済んだんじゃないか？

史上最年少で名人挑戦を果たした主人公が、妹の天衣と共に自身は名人、天衣は女王のタイトルを目指す話。

# 目次

一番になりたくて	1
解説のおしごと	4
退路封鎖	9
ライバル	14
私たちの夢	19
研修会試験	23
天衣とあい	29
山刀伐研究会	34
棋帝戦挑決	39
薬指	44
詰将棋、意味ないです	50
わがまま	54
夜風に	58
ロケット	62
揮毫	67
王将	72
打ち歩	78
屋敷	85
着信	90
共に東京へ	95
プロとスポンサー	99

一番になりたくて

(……………までか)

一つ深呼吸をして、盤面を見る。まだ自玉に詰みはないが、と金と成桂に左右挟撃の形。対して敵玉は上部が広く、入玉が狙える態勢だった。

「負けました。強くなったね」

そう言うと、食い入るように盤を覗き込んでいた対局相手の少女、夜叉神天衣は跳ねるように顔を上げた。その顔は勝負の余韻からか、勝利の喜びからか、あるいは別の理由からか、うっすらと紅潮している。

「それじゃあ、やつと……」

「うん。この実力なら、研修会でも順調に勝ち上がっていけるだろう。本当はまだ、早すぎる気もするけど」

「でも、勝ったわよ！ 約束したじゃない、飛車落ちで勝てたら研修会に挑戦していいって！」

「もちろんだよ。たぶん天衣ならDクラスくらいで入会になると思うけど、B2クラスまで昇級すれば晴れて女流棋士だ」

その程度簡単よ、と一層背筋を伸ばして天衣は答えた。この強気さも、プロを目指すうえで必要な才能だ。将棋とは孤独な競技だ。対局中に信じられるのは自分だけで、勝負の最中で自分自身が揺らぐようでは、相手と戦う以前の問題だ。

僕——夜叉神蒼天そうてんがプロ棋士となり、妹の天衣が女流棋士となること。揃って将棋の世界で生きることが、僕ら二人の夢だった。いや、本当は二人の夢という表現は正確ではない。今は亡き父と母、親子四人の夢だった。二年前に僕たちの前から旅立ってしまった二人に、プロとしての姿を見せられたのは僕だけで、一刻も早く女流棋士・夜叉神天衣の誕生の報を墓前に届けることが、僕たちの願いだった。

幸い、天衣には才能があった。まだ終盤の切れ味には甘さがあるものの、序中盤での不安定な将棋をまとめあげるバランス感覚は、既に既存の女流棋士を遥かに超えてプロ並みと言ってもいい。そしてそ

の大局観に基づいた大胆な構想……間違いなく、将来は棋界を代表する女流棋士になってくれるだろう。いや、流石に身内鬮肩がすぎるだろうか？

「お兄さま」

「ん、なんだい？」

「お兄さまに師匠になってもらうことはできないの？」

身内同士で師弟関係を結ぶことを制限する規則はない。しかし、親子の師弟は前例はあれど、兄妹での師弟は過去に例がない。もちろん問題があるわけではないけど、無為に好奇の目を増やすこともないだろう。ただでさえ兄妹棋士ということで話題になるだろうに。

「特に定跡を外す手を指す局面でもないからね。それに、昔から月光先生にお願ひしてあることだし」

アマチュア名人のタイトルを獲得した父は、イベントで当時名人位にあった月光先生と対局している。それがきっかけで父と月光先生の間にも個人的な友誼が生まれ、なんと光栄なことか月光先生の方から弟子取りのお声をかけていただいたんだ。

その時の心持といえば、正に天に昇ろうかというものだった。月光先生といえば月光流の寄せ。光の速さで敵玉を捉える光速の終盤術。現代の将棋指しで、あの終盤力に憧れない者など居るはずがないだ。

そして、僕がプロ入りした際に天衣についてもお願いして、「私でよければ」と言っていたにいたっている。

「お兄さまがいいの。それとも、私じゃあお兄さまの弟子として不満？」

「え？ いやいや」

天衣は盤越しに正座したまま、少し目を伏せて口を尖らせている。わが妹ながら容姿に恵まれている天衣は、そんな拗ねた様子も僕にとっては可愛らしく映るだけだ。

「別に、関係が師弟でも兄妹弟子でも将棋指す頻度や時間は変わらないぞ？」

今更肩書に師匠の文字が増えたところで、僕たちの関係に特段変化

もないだろうに。この子にとって、何がそんなに重要なんだろう。

一般的に師匠と弟子といえ、門外不出とか一子相伝とか、付き切りで師匠が弟子を指導して、技のすべてを伝授するとかそんなイメージがあるかもしれない。しかし将棋界では、他人に教わることが出来る技術なんて高が知れている。そんな小手先の技術よりも、流した血と汗と涙の量で争う世界だ。

さらに言えば、師匠から教わるのは将棋界での振る舞いなど社会的なことや、タイトル戦などいつもと違う環境、いつもと違う持ち時間で心身の準備の仕方等経験則的なことだ。そういった面では、言うまでもなく僕より月光先生の方が優っている。僕自身、若くして分不相応な世間の注目を集めた際は、月光先生の教えに大いに助けていた。いた。兎角、「将棋指しかくあれかし」と全棋士の模範となるべき人。それがわが師、月光先生だ。

「何にそんなに拘るの？ 書類上、誰の名前が入ってようが実利はそんなに変わらないし、むしろ月光先生の方が箔が付くぞ？」

それに天衣は僕の妹ってことでただでさえ注目されるだろうに、兄妹で師弟となれば無駄な注目浴びちやうよ？」

「え、だ、だって……」

いつも歯切れよくズバズバと物申す天衣にとっては、珍しく言いよどむ。目が泳ぐ。

「言いつらいこと？」

「っ！ わかったわよ！ 言うわよ！ 言うから！」

「う、うん？」

すごい剣幕だ。ぎゅつと目をつぶり、眉が眉間に寄っている。あ、これ時間に追われたときに善悪が判らない手を指しちやうよときの癖だ。矯正しないとなあ。

「お兄さまの一番になりたいのっ！」

## 解説のおしごと

「鹿路庭さん、兄妹の師弟ってどう思います?」

「へ? なんですかいきなり」

場所は東京。今日はネットメディアによる将棋中継の解説役の仕事だ。将棋を指すだけでなく、こうしたメディアの露出を伴う普及活動なんかも、棋士にとって大切な仕事であり収入源になる。

中継開始前の控室で、姿見の前で念入りに自身の髪や服の乱れをチエックする、今日の聞き手を担当する鹿路庭さんに問いを投げる。「妹が研修会に入会するんですよ。で、師匠を月光先生にお願いしようと思って話を通しておいたんですけど、本人は僕が良いって言うんです」

「選択肢が贅沢ですねえ。妹さんですか、別にお兄さんが師匠でも問題ないんじゃないですか?」

鹿路庭さんは上半身だけをひねって、鹿路庭さんの背後に座っている僕に顔を向ける。ちよ、その姿勢胸が強調されるんですけど! エロい。眼福。目に毒。ダメだつて。ちゃんと目を見て会話しろ。でも視線を引き寄せられる。しょうがないよ男だもん。これが世に言う乳トンの万有引力か……。

「将棋界初の兄妹師弟つてことで、初めから無駄に注目を背負うのもどうかと思うんですね。ただでさえ僕の妹つてことで注目浴びるのに」

成績が順調な時に注目されるのはいいんだけど、注目された上で負けが込むってというのは、結構堪えるものだ。僕自身つい最近経験した、苦い記憶が頭をよぎる。もし過度に注目されて女流入りしておいてデビューでこけると、立ち直るのに相当時間が必要だろう。

「注目されるのはいいことじゃないですか? 対局の少ない女流では、知名度がそのまま対局以外の仕事に繋がりますよ? それに、どうせ夜叉神さんの妹つて時点で、どうしても話題になりますよ。そこに何かプラスアルファしても、大したことじゃないと思います」

「そうなんです?」

「そうなんです。あの夜叉神八段の妹なんです。それから、本人が夜叉神さんを希望しているんです。深く考えすぎずに弟子にしてあげればいいじゃないですか」

「そうなのか……僕が深く考えすぎてるのかなあ。でも、確かに元々注目を集める土台はそろっているし。うまくいけば史上最年少で女流入りして、プロの妹で、しかもあれだけの容姿で。考えてみれば、これに更に付け加えてもおまけぐらいにしかならないってのは一理あるかも。」

「みなさんこんにちは。本日は棋帝戦決勝トーナメント、名人対栃木八段の対局をお送りします！ 聞き手を務めますのは私、女流棋士の鹿路庭です」

中継が始まると、鹿路庭さんはこう、より輝いて見えるね。元々が綺麗な女性ってこともあるけど、衆目を集めることでよりイキイキするって感じだ。女流棋士でなくても、アイドルとかアナウンサーとかでも有名になっただんじやないかな。そういう意味では、そんなタレントが将棋界に来てくれたことは将棋界にとって大きなプラスだ。将棋に興味を持つてくれる人を新規に取り入れるには、将棋以外の部分で注目を集めることが重要だ。そういう意味では、天衣が過大に注目されることは将棋界全体を考えれば、絶対に良いことだ。

「本日の解説の先生をご紹介します。史上最年少で名人挑戦を果たした『開闢以来の天才』夜叉神蒼天八段です！」

「こんにちは。ご紹介に与りました夜叉神です。本日はよろしくおねがいします」

なんか最近、御大層な二つ名で呼ばれることが増えた。個人的にはそれ、過大広告にもほどがあるから止めてほしいんだけど……。

棋戦の説明を終え、その後番組はお決まりの定型的に進行して（スツップが掲げるフリップを読み上げるだけ）両対局者の紹介に入る。「先手を持ちますは栃木八段。栃木県栃木市出身で、ミスター栃木と呼ばれることもありますね。タイトルを獲ってもおかしくないと言われる実力を持ちながら、まだタイトルには手が届きません。念願の



初タイトルに向け駒を進めたいところです。夜叉神先生は、栃木八段にどのような印象をお持ちでしょうか」

「はい、横歩取りが得意で、大ゴマがビュンビュン飛び交う派手な将棋を好む印象ですね。ただ最近は横歩取りが戦法として厳しくなってきたのですが、それでも決勝トーナメントまで勝ち上がってきたことは、確かな実力の証明だと思います」

「では対して後手の名人ですが、夜叉神先生はつい最近名人戦を名人と戦ってらっしゃいましたね。結果は4―0で惜しくも敗退となりましたが、どのような印象でしたでしょうか？」

ここで鹿路庭さんからキラーパス！ まだ生々しい敗戦の傷に触らないで！ ただ、こういうぶつちやけトークも視聴者の好むところで、そういう意味ではやはり鹿路庭さんは経験豊富なだけあり中継の盛り上げ上手と言える。

「せっかくフオローしてもらってもスイープ負けって言っちゃったら全然惜しさが無いじゃないですか！ まだ新しい心の傷を抉らないで！」

まあ名人の対局を解説する時点で、この話題を振られるのはわかってたからね。せっかく振ってもらったんだから大げさにリアクションしておこう。というか名人戦四連敗が記憶に新しい僕を解説に呼ぶ運営もなかなか鬼畜だよね。普及活動も大事な仕事だから受けなければ。

「話を戻して。名人についてですか……」

名人。 齢40の半ばを超えながらも、将棋界七タイトルのうち三冠を保持する、将棋界の頂点に君臨し続ける大棋士だ。ただ今期に入ってからあまり成績が上がらず、勝率は五割丁度。第三次「名人衰えたな」期に入っている。いや三冠で衰えたってなんやねん。

確かに、名人の勝率に大きく貢献している僕との名人戦四連勝を除けば、勝率は3割台だから成績は下り坂とも言える。多分、年齢による衰えは確かにあって、かつてのようにはすべての対局で力を出し切るのには難しくなっているんだろう。ただ、そのリソースを集中させた場合の強さは未だ健在だ。だって、名人戦の時この人鬼のように強かつ

たからね？　　というか、七つのタイトルを独占しながら、つまりタイトル戦でトップオブトップの棋士たちばかりと対戦しながら8割を超える勝率を残した全盛期と比べれば、そりゃ常に衰えてるわ。名人衰えたな（当社比）。

名人が将棋界に現れて以来、その圧倒的に輝く才能は、常に将棋界を照らしてきた。まるで太陽のように。その光はかつて地表を照らした月の光をも掻き消して、長く将棋界に安定をもたらした。この20年余り、間違いなく将棋界は、名人の統治下にあった。その日が一時的に沈むことはあれど、また当然のように昇ってくると、多くの人に信じられている。本来彼を敵としてみなさなければならぬ同業の棋士でさえもだ。

結局何が言いたいかというと、名人はその輝きを失ってはいないということだ。

将棋は角換わりの定跡形となり、中盤で名人がリードを奪いかけていて、そこで栃木八段が長考に沈む。鹿路庭さんが爆弾を投下してきたのは、そんな時だった。

「そういえば夜叉神先生には、女流棋士を目指して研修会入りを控える妹さんがいるんですよね？」

「はい、年の離れた9歳の妹がいます。先日、研修会を受験しようと思ったところなんですよ」

「それで、他の先生に師匠を頼もうとしたら、妹さんにお兄ちゃんがいつて言われたんですよね？　兄弟で仲が良いんですねー」

ちよつと!?　何言ってるの!?　今日は日曜日だから、多分天衣も僕が解説する中継見てくれてるのに！　天衣は照れると攻撃的になるタイプだから、今日帰った後の俺が怒られちゃうじゃん！

「いやー、そういうニュアンスでは無かったですけどね。兄である僕の方が面倒が少ないっていうか」

「お兄ちゃんの一番弟子がいい！　ですもんねえ。そうとう慕われているっていうか、兄妹愛が深いのがわかりますね！」

……ああ、天衣が顔を真っ赤にしてるのが想像つく。噴火寸前って感じの。帰った後、機嫌取るの苦労しそうだなあ。

## 退路封鎖

帰り道、なんとなく天衣と顔を合わせるのは味が悪い気がして、福島駅で電車を降りた。高校を卒業したことや、持ち時間の長い対局の際には終電を逃すことも多いことから、先月から将棋会館の近くで1人暮らしを始めたんだ。天衣と祖父ちゃんが寂しがるから、一か月の三分の一は実家に帰ってたけど。

すっかり暗くなつた帰り道。今日の対局……というよりかは、解説での出来事を振り返る。

あれから鹿路庭さんやネットのコメントに天衣の事実つ込まれまくって、結構色々喋らされたんだよね。将棋ファンの人たちって、棋士の生い立ちとかプライベートな一面が伺えるエピソードが大好きだから。幼いころの天衣が初めて「にいたま」って呼んでくれた話なんかしたら、コメントで『かわいい』の嵐。天衣、どんな顔してあれ見てたんだろう。今度晶さんに聞いてみよう。

マンションに到着して、自室の前。鍵を開けてドアノブを捻ろうとするも、ドアノブが回らない。あれ？ 僕が帰る前から鍵が開いてた？ 今朝の記憶を辿るも、確かに出かける時に施錠したはずだ。つまり、今鍵が開いてるってことは……行動を読まれている。先回りされている。覚悟を決めて、扉を開ける。

「ただいまー」

扉を閉めて、真つ暗な中壁伝いに手を添わせて照明のスイッチを探す。凹凸が指先に触れる。パツと照らされる玄関と廊下。そして……何故か目の前で仁王立ちしている天衣。

「ぬうおあ!!? え!? おまつ、な、なにしてんだよ!」

「おかえりなさいお兄さま。あら、鍵を開ける音がしたから可愛い妹がお迎えに来たのに、結構な対応ね?」

「びつくりするだろ! 電気くらい点けろよ!」

「それだと脅かしにならないじゃない」

いや、そもそも脅かすなよという言葉は、空気を震わす前に飲み込んだ。早く上がって? という天衣の言葉に、自分がまだ靴も脱いでい

ないことに思い当たる。というか上がってって、ここ僕の家なんだけど。

居間に入る。殺風景な部屋だ。板張りの床に、白い壁紙。ど真ん中にソファとテーブル、ソファと向き合う形でテレビ、それと壁際にハンガーラックがあるだけ。天衣は腰掛け銀のようにどかつとソファのど真ん中に掛けた。僕はスーツの上着を脱いでハンガーにかけてから天衣の隣に向かう。

「で、今日は随分と他人の話題で盛り上がったたわね？」

僕が天衣の左隣に着地するなり、開口一番天衣が言った。やっぱりそのことだよね……

気位が高い天衣は他人に隙を見せたがらない。例外的に僕にだけ年相応に甘えてきてくれるけど、それだって必ず二人でいる時だけだ。兄を信頼してくれていて、なおかつその兄が矜持を傷つけるような話を言いふらすもんだから、信頼を裏切られたと感じているのかもしれない。ただ天衣よ、実家にいる時は結構晶さん始め屋敷の人たちに覗き見されてるぞ。天衣としては知らぬが仏かと思つて知らせてないけど。

両手を合わせて天衣に向かって頭を下げる。悪かつたつてこの通りだ。許してください。だけど天衣の怒りはそんなことじゃ収まらない。

「あんな昔の事まで持ち出して、しかもネット中継で……よくも恥をさらしてくれたわね！」

「いやほんとすまんかつたつて！ 申し訳ない！」

「しかも女流棋士にデレデレしちゃつて！」

「へ!? いやデレデレはしてなかつたでしょ!？」

「してたわよ！ 胸だつてチラチラ見てたくせに！」

「見てない！ 見てないつて冤罪だ！ コメントでもそんなの指摘されてなかつたじゃん！」

「他の誰にもわからなくても私にはわかるの！」

なんだよその無敵理論。抗議の仕様がなないじゃないか。

「見ないように努力はしたから！」

「ほらやっぱり見てたんじやない。変態」

その変態認定には断固として待ったをかけた。仕方ないじゃん僕だって男なんだよ。吸い寄せられちゃうんだよ。

「いい？ あなたは夜叉神の跡取りなの。あんまり世間に情けない姿をさらさないの」

「はい、すいません……」

あれ？ 怒りの矛先はそっちなのか？ 妹として女性にだらしない兄が許せなかったってことが怒りのメインソース？

言いたいことは言ったのか、まったくと眩きながら、ソファアに座る僕の足の間に背中向きで腰を下ろしてきた。僕の顎のあたりに天衣の頭頂部がくるせいで、髪の毛が首筋に当たってくすぐったい。

「私に過剰な注目が集まらないかって心配してたみたいだけど、ネット中継上で女流デビュー前の妹の話することは注目を集めることに繋がらないのかしら？」

「それ言い出したの僕じゃない……」

あれは鹿路庭さんから振ってきた話題だ。その後天衣の話題で盛り上がってべらべら喋ったのは他ならぬ僕だけ。

「これはもう責任取って貰って、お兄さまの籍に入れてもらうしかないわね？」

なんだその表現。将棋界においては弟子入りすることはその師匠の一門に入るってことだから、あながち間違ってもないかもだけど。師匠ってというのは将棋を教える先生っていうより、後継人とか身元保証人とかそういう意味合いが強い。有難いことに僕は師匠である月光先生に結構な頻度で将棋も教わったけどね。

「お前意味わかってそれ言ってるのか？ その言い方外でするんじゃないぞ」

天衣が背中から僕の胸にもたれかかってくる。視線を下げると、体が仰向けに傾いた関係で顔が上向いた天衣と目が合った。口角と目が上がった、挑戦的な笑みを浮かべている。

「あら、どうしようかしら。もし誰かに話しを振られたら、ポロっと喋っちゃうかもしれないわね？」

明らかに故意犯じゃねえか。誰だようちの妹に変な言葉教えた奴。

「勘弁してくれ……」

「ならもう頭金ね。私を弟子にして下さるかしら？ お兄さま」

僕の失策を見逃さない、天衣の退路封鎖の巧みな寄せの前には、僕には投了以外の選択肢は残っていないのだった。

二人とも夕食をまだ摂ってなかったため、あり合わせで食事を用意することにした。作る料理は炒飯。というか、今の僕の料理レパートリーで、他人に出せる物なんて炒飯くらいだ。

居間にいる天衣からの視線を背中を感じる。瞳は心の窓と言うが、今の天衣の視線は雄弁だ。つまり、「お前にまともな料理なんて作れるのか」ということ。安心して欲しい。一応一か月ほど自炊をしているが、食べられないほど不味く失敗したことはない。我ながら料理のハードルが低すぎる。

「出来たよ。味薄かったら塩コシヨウナリ醤油なりで調整してな」

テーブルに二つ、炒飯を盛りつけた皿を並べる。二人で揃っていただきますと唱えたが、その後も天衣は不審そうな目で皿を眺めるばかりでなかなか手を付けようとしなない。どうやら僕が食べ始めるのを待っているらしい。毒なんか入ってねえよ。

僕が口をつけてから、ようやく天衣も食べ始めた。

「お兄さま、料理なんて出来たの？ 家では料理しているところ、見たことなかったけど」

「こつちに来てから始めてね。料理本とか買って勉強してるんだ」

ふーん、とだけ言ってまた食事に戻る天衣。食べてくれてるってことは、飛び切り口に合わないってわけではなさそうだ。良かった。

小食で量が少ないため、早く食べ終わったのは天衣の方だった。どうだったと聞けば、思ったよりまともで驚いたとのこと。どれだけ不安に思われてたんだ。

僕が多く作りすぎた残りの炒飯に悪戦苦闘していると、天衣が僕に問いかけてきた。

「お兄さまは、お料理好きなの？」

「今のところは楽しいよ。始めたばかりだからね。そのうち慣れると面倒に感じるのかもしれないけど。何？ 天衣も料理に興味あるの？」

「ええ、そうね」

そこまで言って、自分の分の食器をかたづけける天衣。洗い物片づけとくわ、と言ってキッチンに向かう天衣に、よろしくーと返して、炒飯との鬺いに戻る。

それから数分後。あれ、あいつ食器洗いとかやったことあるのか？ という疑問が浮かぶのと、キッチンから陶器が割れる音、そして天衣の悲鳴が聞こえたのは、ほぼ同時のことだった。



## ライバル

ここは時間の使いどころだ。棋士としての本能がそう叫んでいる。しかし、僕に残された時間は僅かしかない。決めるしかない。候補は三択。さあ、どうする……？

対局は、棋帝戦決勝トーナメントの第一回戦。予選を勝ち抜いた棋士とシード保持者の16人でトーナメント戦を行い、優勝者が棋帝への挑戦権を得る。僕は去年のこのトーナメントでベスト4に入っていたため、シード権を行使しての出場だ。棋帝挑戦へ向けてあと四勝。

そんな将棋で、僕は選択を迫られていた。ただいまの時間は11時半。昼休みに入る前の、重要な選択になる。

「カキフライ定食か、チキンカツ定食か、はたまた唐揚げ定食か……」

そう、昼食注文である。

たかが食事と侮るなかれ。将棋とは頭脳の格闘技だ。脳とは、人体の中で最もエネルギーを消費する器官。その脳を何時間もフル稼働させるものだから、食事でエネルギーを補給することは大変重要なことなのだ。あと、食べると気分もリフレッシュするしね。

将棋？ 将棋の方は僕の得意な力戦系の乱戦に持ち込んで、形勢はこちらやや優勢ってところだ。持ち時間も相手の方が一時間強多く消費していることを考えると、こちらはかなり気分が良い局面だろう。将棋で気分が良い時は、食事も気分よくガツンといくに限る。

僕が長考に沈んでいると、将棋会館職員の方から、まだ決まりませんかと声がかかる。ええいままよ！

「唐揚げ定食で！ ああいや、唐揚げ定食に唐揚げ三つ追加！」

財布を取りだして職員さんにお金を渡す。その後、同様に対局相手にも注文を聞いて、相手はアロエのヨーグルトを頼んでいた。これはこの人が元からの小食でなければ、相当この局面を悪く見ている証拠だ。飯なんて食べてる場合じゃないから、軽いものでパツと済ませて将棋に集中する手筋だ。

僕たち対局者からお金とメニュー表を受け取った職員さんが、対局室から退出する。

それから相手の手番のまま一手も指さずに昼食休憩に入った。

控室に戻ると、机の上に注文した唐揚げ定食が届いていた。唐揚げを三つ追加したことで、かなりポリユミーだ。対局中の昼食って、僕の場合はあまり豪華なもの頼んでも頭の中に余裕が無いと味わって食べられないんだよね。だからよっぽど午前で形勢が良くなるとか持ち時間に余裕があるとかでないと、消化の良さとか食べやすさで昼食を選ぶことになる。その分、気分よく食べられるときはガッツリ目の物を頼む。これが夜叉神流昼飯の流儀である。

昼食休憩が明けて対局が再開されると、将棋の内容は一気に傾いた。相手が乱戦を纏めきれずに綻びが生じると、楔となる銀を敵陣ど真ん中の5二の地点に打ち込んだ。取ったら即詰み、取らずとも一手一手の寄りになる。この手の四手後に相手は投了した。持ち時間4時間の棋戦で僕の消費時間は1時間弱。快勝譜だ。

その後一時間感想戦や観戦記者の取材を受け、帰り支度が済んだのが15時となった。この棋戦は夕食休憩が無いから、対局が夕方まで長引くと脳がエネルギー切れを起こす恐れがある。その対策に補給食を結構持ち込んだんだけど、今回は出番が無かったな。

対局室のある四階からエレベーターで一階まで降りると、見知った顔が二人、ベンチに座っているのを見つけた。一人は腰当たりまでまっすぐ伸びる艶やかな黒髪が特徴の、女流タイトルの山城桜花をもつ供御飯万智。そしてもう一人は、史上最年少でタイトルを獲得した九頭竜八一竜王だ。二人とは小学生の頃からの知り合いで、特に八一は互いの師匠が兄弟弟子だから、棋士系統図上は従兄弟の関係にあたる。

その二人は何やら話をしているようだったので、手を挙げての挨拶だけして通り過ぎようとしたら、二人の方から声をかけてきた。

「こなたら蒼天くんを待ったんやから、素通りせいでよ」

え？ 待つてた？ 何か約束があつたつけど記憶を探ってみるも、心当たりは見つからなかった。

「俺たちさつきまで検討室に居たんだけど、供御飯さんが俺と蒼天に頼みたいことがあるつて言うんだ」

そういうことか。僕と八一に頼み事つていうと、研究会とか？ あるいは供御飯は記者としての活動もしてるから、そっち方面かな。

場所を変えて、近くの喫茶店に入った。席について、珈琲を三つ注文する。

「とりあえず、トーナメント初戦突破おめでどう」

「おめでとさんどす」

今日は関西では僕の対局しか開催されていなかったから、二人が検討室に居たということは僕の将棋を観に会館に来たということになる。諸先輩棋士から「野蛮」「変態」「崖っぷちの綱渡りを全力疾走してスリルを楽しむような将棋」「剣も盾も放り投げて全裸で殴り合う棋風」と大変好意的な評価を頂いている僕の将棋は、検討が大変盛り上がると思いたいことがある。

「ありがとう。どうせ碌なこと言われてなかったんだろうけど」

「夜叉神が今日も夜叉神してる、いう風に言われとつたよ」

「それ褒めてる？」

夜叉神するという動詞がどのような意味を持つているのか。いや聞きたくないけど。

「褒めてる……と思う。それで供御飯さん、話つて何？」

苦笑いしながら八一が供御飯に促す。八一の棋風も割とゲテモノ扱いされているから、僕に共感してくれているのかもしれない。

『将棋世界』から、二人の若き中学生棋士つてテーマでお二人の記事を書いてくれて依頼があつたんどす。ほして、対談形式の記事にしたいと思つて」

「え、今からやるの？」

「取材自体はアポ取つて後日や。今日は取材ん申込やけどす。」  
「なるほど」

その後三人でスケジュール合わせをして、共通して空いている日に

予定を組んだ。供御飯は大学、僕は近く対局があるため、基本的に暇な八一が僕たちに合わせる形になった。

供御飯の話が終わったことで、再び話題は今日の僕の将棋の内容になった。僕と八一が口頭で譜号を言い合って検討を重ねる。八一も力戦系の将棋が得意な棋士だけど、指し手の方針が僕と結構違うから、八一のアイデアを吸収することは僕にとって結構有意義だ。多分、八一にとってもそれは同じで、だから今日会館まで足を運んだのだろう。

暫く僕らであーじゃないこーでもないと言い合っていると、ひとり取り残される格好になっていた供御飯が急にそういえば、と声をあげた。

「二人とも、弟子を取ったんやって?」

「え、そうなの?」

二人でハモってしまった。僕が弟子を取るのには確かだけど、彼もなの?」

「竜王サン、この前の棋帝戦の中継、観てへんの? 蒼天くん、解説の中で言うと思ったんや」

「そう。妹が研修会の入試受けるからさ」

「妹さんか。遠巻きには見たことあったような?」

八一が天衣を見たとしたら、名人戦の前夜祭かな? 第一局の会場

が大阪だったから、天衣も来てくれていたはず。

「竜王サンに至っては、内弟子にしはったんやって? えらい入れ込んでおざりますなあ?」

内弟子とは、住み込みの弟子のことだ。今時内弟子なんて珍しいけど、他ならぬ八一も内弟子を経験してプロになった棋士だ。師匠である清滝先生の家に住み込みで指導してもらって、そのメリットを肌身で感じてのことなのだろう。

「へー、えらい思い切ったじゃん。やっぱり自分の経験からの判断?」

「まあ……そんな感じ、かな」

やっぱりそうなのか。となると僕と同じ屋根の下暮らしていた天衣も、これまで事実上僕の内弟子みたいなもんだ。僕の存在で、天衣

の成長にいい影響を与えられていたのかな。そうだったら嬉しいけど。

その子の年齢を聞くと、9歳だという。天衣と同じ年じゃん。僕にとつての八一のように、身近に居るライバルとして並び立ってくれたらいいな。いや、流石に天衣と同レベルを求めるのは無茶があるかな？

「今度、互いに弟子を連れて研究会しようよ。僕たちの子供の時みたいにな」

昔は、よく一門で研究会を開いていたんだ。月光先生、清滝先生、僕、八一と、八一の姉弟子の銀子ちゃん。そこで初めて八一と指した時、その才能に衝撃を受けた。この子が生涯をかけて戦っていく敵になるのだって、直感した。その予感は当たって、年が二つ上な分常に僕が前を行っていたけど、必ず八一はすぐ後ろを着いてきた。奨励会入会も、中学生棋士になった事も。ただ、今は……僕より先に、竜王のタイトルを手に入れた。

狭い世界で同じ相手と何十年と戦っていく将棋の世界では、同年代のライバルに勝るモチベーターは多分ない。天衣にも、そういう存在が出来たらいいな。

## 私たちの夢

私たち兄妹の——いや、私たち家族の話をしようと思う。

私が将棋を覚えたのがいつなのか、私は知らない。というのも、私が生まれた夜叉神家は将棋一家だったから。言葉よりも先に将棋を覚えて、私は育った。

物心ついたころには、お兄さまは既にプロ養成機関である奨励会に入会していて、次々と最年少昇段記録を更新していた。お父さまはアマチュアながらも、アマ名人を獲得したこともある強豪だった。家では毎日、二人は将棋を指していた。私とお母さまはそれを観たり、記録を取ったり、あるいは私たちが将棋を指したりしていた。

お母さまは、私が将棋を指すことを望んでいないようだった。お母さまはそこまで将棋が強くなかったし、お父さまほど将棋に熱心でもなかったから。私が可愛いお洋服を着て、お人形遊びをして、おとぎ話に夢を見て……そんなお姫様のような、可愛らしい女の子になって欲しい。そんな願いを、幼いころから私は感じ取っていた。お兄さまが男の子で、しかも将棋一筋だったから、私にかける希望も大きかったと思う。

しかし、私が選んだのは……お兄さまと同じように、将棋の方だった。

私が将棋に熱中することを、お父さまとお兄さまはとても喜んでくれた。そして私に将棋に関する様々なことを教えてくれた。効率の良い勉強の仕方、戦法の内容や形勢判断の考え方、そして彼らが指している将棋の解説……。このころから、二人が指している将棋が恐ろしく高度だということに気が付いた。二人の解説は、ちよつとしか解らなかった。ただ、そのほんの一部の理解が、私に再度将棋の難しさとお奥深さ、そして面白さを教えてくれて、更に将棋が好きになった。お兄さまと指すことも多くなって、だいたい勝たせてもらっていた。

そうやって将棋にどんどのめり込んでいく私を、お母さまは内心どう思っていたのだろう。その頃から、私の将棋でお母さまを喜ばせたいと思うようになった。そんな時に、将棋界に女流棋士という制度

があることを知った。そしてその女流タイトルの一つに目が留まった。

そのタイトルの名は、女王。

これだ、と思った。

おとぎ話のようなお姫様とはちよつと違うけど、女王さまになれば、お母さまもきつと喜んでくれる。タイトル戦に出られれば、綺麗な和服で身を飾れる。お母さまが私に望む、女の子らしい姿を見せてあげられる。そう思った私は、その場で宣言した。

「天衣は、将棋の女王さまになります！」

お父さまとお兄さまは大喜びしてくれたけど、お母さまは苦笑いだった。どこまでも将棋一筋な私に、やはり思うところはあったのだろう。でも最後には私を抱きしめて、笑ってくれた。

そしてこのころ、お兄さまはプロ棋士になった。13歳での四段昇段は、史上最年少の快挙だった。

お兄さまが特別な人だつて初めて気づいたのは、この時だった。お兄さまと私は年の離れた兄妹だったから、お兄さまは私のことをとても可愛がってくれていた。私もそんなお兄さまに甘えて、何をしても後ろをついて回っていた。一緒に暮らして、ご飯を食べて、お風呂に入つて、将棋を指して。そんな人が、実は将棋の世界に選ばれたヒーローだったんだつて！ 少なくとも私の眼にはそう映つたし、それは今も変わらない。

私と将棋を指すときのお兄さまは、いつもの通りに優しくかった。良い手を指すと褒めてくれたし、悪手を指したらそれを咎める手順を示した上で手を戻して導いてくれた。そんなお兄さまも好きだったけど、でも、いつもお父さまとの対局で見せる表情を、私に見せてくれたことは一度もなかった。

盤を覗き込んで脳をフル回転させて、必死に先を読むときの表情。眉を少し寄せ、垣間見える苦悶の色。微かに上気する頬。将棋指しが……一番輝く顔。私の知るその表情はいつだって横から見るもので。私はお兄さまのことは何だつて分かつてるつもりだけど、その顔を正面から見られたことは、まだない。

お兄さまの指導もあつて、私はどんどん力をつけていった。お兄さまの将棋の、理解できる部分が増える度、私は自分の上達を実感できた。そしてスーパーヒーローの偉大な輝きに照らされて浮き彫りになる、私とお兄さまの間にあるあまりにも大きな力の差も。私はまだお兄さまの将棋の、氷山の一角しか見えていない。全容を知りたいと頑張つて潜つても、全然息が続かない。成長して、前より息が持つようになつて、より深く潜れるようになると、その度に底の見えない巨大さに感動する。その美しさにより惹きつけられる。

以前はお兄さまとお父さまで対局することが多かったが、そこに私に加わるようになった。一人対局からあぶれることになるから、多くの場合私とお父さまで、どちらがお兄さまと指すか争っていた。駒落ちでお父さまと勝負して、勝つた方がお兄さまと将棋が指せる。そんなお兄さまへの挑戦者決定戦を、お兄さまとお母さまが見守っている。これが夜叉神家の団欒だった。

そんな家族の幸せは突然にして奪われた。交通事故でお父さまとお母さまが揃つて旅立つてしまったから。

悲しかった。悔しかった。お父さま、お母さまと二度と会えないことが。四人の時間が奪われてしまったことが。私の夢を、お母さまの願いを——女王としての姿を、見せられなかったことが。

泣いてばかりの私と違つて、お兄さまは泣いてばかりはいられなかった。年長いたおじいちゃまの代わりに、葬儀や役所の手続きや親戚、知り合いへの連絡をしなければいけなかったから。おじいちゃまの家に移つた私たちだけ、しばらくの間、日中はお兄さまと居られなかった。その間、お兄さまも私を置いていなくなつちゃうんじゃないかと、怖かった。

そんな私の涙を拭ってくれたのは、やはりお兄さまと将棋だった。ふさぎ込んでいる私を、お兄さまは無理やり将棋盤の前に引きずり出した。その日、お兄さまは一切手加減をしてくれなかった。角換わりから厚みで押し切る将棋。お父さまの将棋だった。将棋を始めてから、初めて最後まで、詰まされるまで指した。少しでも、お父さまとの将棋を続けていたかった。お父さまとお母さまからもらつた私の



将棋を、続けていたかった。

将棋が終わると、お兄さまが言った。

「僕は父さんとの夢を叶えるから、天衣は母さんの願いを叶えてあげて」

——二人で、四人の夢を叶えよう。

明日は研修会試験。女流棋士への道の入り口。私たちの夢の、スタートラインに立つ日。

## 研修会試験

「蒼天くん。起きて」

体を揺すられる感覚で意識が浮上する。声が聞こえた。優しく、暖かくて、久しく聞いてなかった声。頭に何かの疑問を感じた気がするけど、睡魔という重力に抑え込まれてゆっくりとしか浮かび上がってこない僕の意識では、まだその疑問を咀嚼することが出来ないでいた。

「蒼天くん。朝よ。蒼天くん」

再度強く揺すられて、重力から解放された意識がふっと浮かび上がってくる。認識しきれなかった声が鼓膜から脳に染み込んでくる。懐かしいこの声……今はもう失われたはずのこの声が、なんで……。「母さん？」

ハッと目を開くと目の前に、満面の笑みを浮かべた天衣の顔があった。

「へっ？ 母さんは？ あれ？ 天衣？」

僕の反応が可笑しいのか、顔を覆って笑いだす天衣。今のは……声真似？ というか、なんで天衣に起こされてるんだ？

仰向けの体制のまま、枕元にある時計を見上げる。7時半にセットしたはずの目覚まし時計の針は、今は8時を指し示していた。

「げっ、寝過こした!？」

がばつと布団ごと蹴り上げて跳び起きる。今日は天衣の研修会試験の日だ。よりによってなんでこんな日に！ 急いで朝食作らないと！

「大丈夫よお兄さま。その目覚まし止めたの、私だから」

「はあ!？」

どういうことだ。寝起きの僕の頭がいけないのか、状況が全く飲み込めない。なんで、天衣がそんなことを。

「なんで？ それに、さっきの声」

「なかなか起きないから驚かそうとしただけよ。さ、早く布団から出て。朝食出来てるから、早く食べましょう?」

天衣は研修会に備えて、昨日から福島の僕の家に泊まりに来ていた。別に神戸の屋敷からだと遠すぎるってわけではないけれど、折角会館のすぐ近くに僕の部屋があるんだから、活用しようというわけだ。ただし移動の分で浮くはずだった時間は、僕たちの朝食に化けてしまったが。

テーブルの上にはご飯とハムエッグ、サラダとみそ汁が並んでいた。これ、天衣が作ったのか？

「お前、料理なんて出来たの？」

「こんなの料理なんて上等なものじゃないわ。フライパンに卵落として、野菜ちぎっただけ。おみそ汁は戸棚にあったインスタントのものだから」

「で、なんでよりによって今日これを作ったの？ 僕が目覚ましを止めてまで」

「新しく勉強した戦法があつたとして、早く実践で使ってみたくありませんよ？ それと同じよ」

次から次へと湧いてくる疑問。屋敷で暮らす環境の天衣が、自分で料理をするシチュエーションなんてあるわけがないよな。となると、どうして料理なんて？ 学校で調理実習でもあつたのだろうか。いや、それよりも。

「緊張してないの？」

「今更じたばたしても仕方ないでしょ？」

当然のように言い放つ天衣。これには、おおと思わず声が出た。これは素直に感心する。今日から将棋の一勝が人生を変えるかもしれない世界に飛び込むというのに、天衣のメンタルは完全にフラット。いつも通りだ。勝負師として、この心臓に毛の生えたような強靱なメンタルは、間違いなく天衣の武器になってくれる。生まれてからずっと天衣を見てきて、初めて知った一面だ。

そんな天衣への感心は、冷める前に早く食べましょう？ という天衣の促しによって打ち切られた。

「じゃあ、いただきます」

まずはハムエッグから。ソースをかけて、箸で一口サイズに切り取って口へ運ぶ。ちよつと半熟目でいい感じ。

「うん、美味しいよ」

「それは卵とソースが美味しいのね。私は焼いただけ」

そんなことを言いながらも、口角がちよつと上がっている。やっぱり褒められると嬉しいんだな。

「あとあれだ、愛情は最高の調味料って言うだろ？ それもあるかもね」

「そんな非科学的なことあるわけないでしょ」

「入ってないの？ 愛情」

「さあ、どうでしょうね？」

微笑みながら流し目を向ける天衣。最近この子を、妙に艶っぽいと感じることがある。早熟な子だとは思ってたけど、早めの思春期だろうか。

研修会の入会試験と言っても、筆記とか、特別な試験を課されるわけじゃない。ただ将棋を3局指して、幹事を務めるプロ棋士に実力を認められれば入会となる。そこは、奨励会の試験とは異なる点だ。

奨励会の場合は対局だけでなく面接や筆記の試験もあって、僕の場合は対局よりこちらの方が緊張した。特に筆記。

当時のタイトル名とタイトルホルダーを全て書けなんて問題が出題されて、名人位に月光先生が就いていることしか知らなかった僕は、それ以外のタイトルに現名人の名前を記入。やっちゃったかーと思いつながら帰って調べると、大体それで正解だった。やっぱ名人つてすげーわ。

「あなたにとって名人は倒すべき敵でしょう？ その相手を持ち上げてどうするのよ」

将棋会館まで歩いて行く途中、僕の奨励会受験時の話を持ち出したら叱責をうけた。9歳の妹にプロの厳しさを諭される僕は一応A級

八段である。

「昔の偉い人の言葉で、彼を知り己を知れば百戦殆うからずつてもがある。相手の力、偉大さを知ること大事なことだよ」

自分と相手の力を分析し、自分の欠点、相手の優っている点を理解することは大切なことだ。如何に相手の弱点を探し出し、自分の有利な土俵で戦うかが、研究第一の現代将棋では求められている。名人の場合、相手の土俵に飛び込んで行ってがっぷり四つの横綱相撲で勝ちやうけど。相手の得意を避けずに勝つ。それが名人が絶対王者と言われる由縁でもある。

話しているうちに、関西将棋会館に到着する。すれ違う職員さんに会釈しながら、五階の対局室へ向かう。まずは研修会幹事の久留野先生にご挨拶しないと。

「おはようございます、久留野先生」

「おはようございます、夜叉神君。ん、その子が噂の妹さんかい？」

「はい。弟子の天衣です。天衣、ご挨拶」

「はじめまして、夜叉神天衣と申します。ご指導よろしくお願いします」

入室を促され、列を作って並んで座っている研修会員の、最後尾に座った天衣。対局室の入り口に立っている僕からだど、他の会員たちがちらちらと天衣を見ているのがよくわかった。僕の妹が研修会入りすることは公言してたし、やっぱりプロの妹ってことで気になるんだらう。

「事務所でもかなり話題になってましたよ？ 天衣君のことは」

「あー、やっぱりですか？」

「しかし、本人は全く緊張した様子がありませんね？ あの歳であれだけ落ち着いているというのは、大したものですよ」

「ええ、それは僕も驚いています」

朝からあんなドツキリを仕掛けてくるくらいだし。マジでびつくりした。

では時間なので、と僕に一礼して久留野先生は対局室へ入り、研修会生たちの前で話を始めた。

天衣、がんばれよ。心の中で念じながら、僕は階段から三回の事務室へ向かった。

「これは夜叉神先生。お疲れ様です」

「あ、男鹿さん。こんにちは。お疲れ様です」

事務室の入り口で、将棋連盟の職員である男鹿さんと出くわした。男鹿さんは元は女流棋士で、若くして引退してからは連盟に就職した。今は、将棋連盟会長付きの秘書を務めている。

「月光先生は理事室ですか？」

「はい。お弟子さんのお話でしょうか？」

「ご存じでしたか。一応報告をと思つて」

月光先生は現役のトップ棋士、A級に在位しながら、将棋連盟の会長も務めている。それだけでも凄いことなのだが、月光先生は更に大きなハンデを背負っている。若いころに患った大病によって、目から光を失ったのだ。それでいながら、名人や名人と同世代の強豪棋士たちと激闘を繰り広げた。そして永世名人の称号を手に入れ、時代を代表する棋士になった。我々棋士がこの方を会長として戴いているのは、その常人離れした足跡に、皆敬服しているからに他ならない。これが僕の師匠、月光先生だ。

理事室の前に立ち、男鹿さんがドアをノックする。中から『どうぞ』と声がかかり、僕は失礼します、と声に発してから理事室に足を踏み入れた。

「夜叉神です。本日は妹の天衣が研修会の試験を受けるということで、ご報告に伺いました」

「はい、聞いていますよ。天衣さんも漸くこの世界に足を踏み入れたのですね。健闘を祈っています」

「ありがとうございます」

頭を下げる。この人は僕を弟子に取ってくれただけでなく、天衣のこともずっと気にかけてくれていた。

「私ももう孫弟子を持つ身になりますか。つい最近弟子を取ったと

思っていたのですが、時間の流れは速いものですね」

僕が月光門下に入門したのが10年前。確かに一番弟子を取って10年で孫弟子が出来たら、将棋界の最短記録かもしれない。調べてないけど。

「そして蒼天君。君も、あと一勝で棋帝戦の挑決ですね。弟子の活躍を期待していますよ?」

「はは……ありがとうございます」

棋帝戦の挑決トーナメントは、僕と逆側の山の挑決進出者は決まっている。名人だ。つい先日の名人戦スリープ負けは記憶に新しい。正直、苦手意識が付いて回る相手だ。

「大丈夫ですよ。相手の事を気にせずに、自分の力を発揮するようにしてください。結果は自然と付いてきますよ」

僕の心中を読まれたのだろうか。月光先生は目が見えない分、音や気配から情報を読み取る力に長けている。僕の声から、弱気を感じ取られたか。

「相手を意識する前にまずは自分です。自分の100%を発揮すること。相手を変えることは出来ませんが、自分のことは変えられるのですから。これは、彼と最も戦った棋士である私の、最大の戦訓です」

月光聖一九段。タイトル通算27期。十七世永世名人の資格を持ち、齢50を超えてA級で活躍する生ける伝説。その月光先生ですら、名人の才能の前に自分を見失ったことがあったのか。誰もが尊敬する、この不世出の名棋士でさえ。

そしてその助言は、今朝天衣から言われたことでもあった。まあ、あの子は単に跳ねつ返りとか、自信過剰ってだけかも知れないけど。

「……頂戴いたします」

「よろしい。さあ、私は職務に戻ります。君は、天衣君を見守ってあげなさい。ご両親の代わりに」

失礼します、と頭を下げ、理事室を後にする。先ほど降りてきた階段を再び上って、対局室へ向かう。

## 天衣とあい

対局室へ戻ると、天衣は久留野先生との対局中だった。えっ、久留野先生自ら出陣ですか!? その将棋は二枚落ちでの対局だった。局面は既に終盤で、天衣の勝勢ともいえる戦況だ。それから数手、駒音高い天衣の指し手とそれに頷きながら思い出王手を続ける久留野先生の手が続ぎ、天衣の玉が囲いから脱出し中段へ逃げたところで王手が続かなくなつた。上手の玉には必至がかかっている。

「負けました」

「ありがとうございました」

背筋を伸ばし、自信満々の表情で礼を返す天衣。周囲の研修会生から、ほーとかすげーとか感嘆の声が漏れる。まあ、天衣は散々僕と駒落ちを指してきてるから、二枚落ちの指し方は慣れてるから。

次局に入る前、投了後の久留野先生が水を飲んでる間に天衣が何かを探すように眼だけで周囲を見渡していた。何だろう? と思つて様子を見ると、天衣と目が合つて、そのまま僕に目配せを送ってくる。僕は苦笑しながら手を振るしかない。ごめん、最終盤しか見てなかつたよ。

「では最後の対局。次の相手は——雛鶴あいくん」

はいっと元気よく手を挙げる少女。そう、呼ばれたのは天衣と同じ年ごろの女の子だった。

「夜叉神天衣さんと対局してください。手合いは振り駒で」

久留野先生は続けて言つた。振り駒ということは、先生は自身の対局を通じて、天衣の実力をこの少女と同等と見たということ——本当か? 身内最良な見方かもしれないが、天衣に並ぶ同世代の女の子はいないだろうと思つていた。現時点でも女流棋戦に参加して十分活躍できるくらいには、僕が鍛えたつもりだったから。

「夜叉神君。流石は君の妹だね」

いつの間にか久留野先生は僕の横に立っていた。

「ありがとうございます」

「一局目の手合いを発表した時、『Fクラスが相手でいいの?』と言い



放ったよ」

「そ、それは大変な失礼を……」

何てことを言っているんだ。多分悪意はないんだろうけど、天然な分余計に質が悪い。というか、その失礼さを指して流石は僕の妹って言っているわけではないよね？　僕が失礼なヤツって言われているわけじゃないよね？

「その言葉通り、その子じゃ相手にならなかったよ。多分、どこで形勢が傾いたかも理解できなかっただろう。大差が付きすぎて後半の天衣さんはほぼノータイム指しでね。実力が測れなかったものだから、私が直接相手したんだ」

そういうことか。それで幹事の先生自ら指すことになったのか。そしてその結果……あの雛鶴さんって子と天衣をぶつける判断をしたっていいのか？

「あの対局相手の子は……」

「雛鶴さんかい。彼女もすごい才能を秘めている子でね。天衣さんと同じ9歳で、まだまだ将棋は粗削りだけど、その原石の大きさなら女性の中でもトップかもしれない」

その言葉を聞いた時、僕は自分の耳を疑った。今、久留野先生は才能なら女性トップ、と言ったか？　この場合、トップクラスと単にトップという評価には、隔絶した差が発生する。なぜなら、今の女性棋界には、一人の少女が絶対的な存在として君臨しているから。

——空銀子女流二冠。清滝先生の弟子で、棋士系統図上僕の従兄弟に当たる女の子。女王、女流玉座のタイトルを保持しながら、女流棋士の道を選ばずに奨励会で二段の地位にある女性。50戦近く女流棋戦で対局しながら、女性には一度も負けたことのない傑物……女王のタイトルを目指す天衣が、いつか倒さなければならぬ相手。

その空銀子と、あの雛鶴さんの才能が同等である。そう久留野先生は評価するのか。天衣と同じ年の、雛鶴あいさんが。

「お願いします」

「よろしくお願いしますっ！」

二人の声が重なって、対局が始まる。振り駒の結果は雛鶴さんの先

手。初手はスタンダードに飛車先の歩を突く2六歩に、天衣は3四歩で答えた。戦型決定の権利は与えませんよ、という手だ。その後互いに角道を開け飛車先を付き合い、先手が横歩を取った。そこで後手から角交換を仕掛け、同銀に2八歩と叩く。これは……。

「4五角戦法!」

周囲の研修会生がどよめく。序盤から激しい将棋になりやすい横歩取りの中でも、これは最も激しい将棋の一つ。序盤から大駒を持ち合い、断崖絶壁で殴り合うような戦法。正確に指せば先手良しとされるため既にプロでは消えた戦法になってはいるが、その最善手に意外な手、奇抜な手が多く、定跡を知らなければ正しく指すことは難しいだろう。そして玉近くで戦いが起こるため、たった一手ミスをするると一転直下、敗北まで真つ逆さまにもなりうる危険な指し方だ。

後手の天衣は定跡を知っているため時間を使わず指し手を進めているが、雛鶴さんはこの戦法を知らなかったのか、一手指す毎に数分を使って考えている。持ち時間35分の研修会の将棋では、このペーすだと序盤で時間を使い切ってしまうだろう。

「あつー!」

そして持ち時間を使い切って1分将棋になった雛鶴さんは、案の定ミスを犯した。中段に打った飛車が疑問手で、角と金銀の二枚替えから飛車の成り込みを許してしまう。

時間も局面も天衣の大優勢。殆ど勝負は決まったと見ていいだろう。少なくとも僕はそう思っていたし、恐らく天衣も同様だっただろう。だけど、隣に立つ久留野先生は違う感想を持っているようだった。

「雛鶴くんの将棋は、ここからなんです」

へ? と僕が間の抜けた声を発すると同時に、雛鶴さんは力強く持ち駒の銀を自陣に打ち込んだ。弾かれた龍が端の香を取りつつ逃げると、駒損はするものの先手玉は一時的に安全になる。その隙に雛鶴さんは後手陣に猛攻をしかけた。プロから見れば無理攻めではあるけど、この戦形特有の玉の薄さ、一手のミスが命取りになるのは天衣の側からも同じことだ。

後手陣で大暴れする雛鶴さんを、天衣はなんとか躲している。今度は天衣が時間を使う番だ。有利だったハズの持ち時間が減っていく。天衣の額から、汗が流れ落ちるのが見えた。

「これ、逆転してるじゃないですか!？」

「いやわからない、わからないよ!」

いつのまにか対局者二人を取り囲むように研修会生が集っていた。こら、将棋の形成判断を対局者に聞こえる声で言うんじゃない。

僕から見ても、体を揺らしながらぶつぶつと何か呟いて思考する雛鶴さんの集中力は、凄まじいものに思えた。秒読みに入ってからかえって読みが深くなってさえいるようだ。序盤からその集中力で将棋に向かえばいいのに。

天衣の玉頭めがけて、雛鶴さんが銀を打ち込んだ。逃げれば即詰み、取っても詰めるが続く勝負手だ。周囲からおお、と歓声上がる。

「あらまあ」

「ええ」

思わず漏れた僕の言葉に久留野先生が同意する。決着の時だ。

玉で打たれた銀を取った天衣は、その銀を使って先手玉を13手の即詰みに討ち取った。雛鶴さんの玉には、天衣に斜め駒が一枚渡ると即詰みが生じる順が潜んでいたのだ。

敵玉を攻めることばかりに集中して、自玉の守りが疎かになる。将棋を指していれば、よくあることだ。ただ、自分のミスによって敗北に叩き落されることは、手も足も出ずに負けることよりも、ある意味では悔しくもある。相手の強さによってではなく、自分の弱さによってもたらされた敗北だから。

終局後も悔し涙を流し続ける雛鶴さんの姿をみて、僕は久留野先生の彼女への評価が決して過大ではないことを知った。悔しさを感じられることも、この世界では大きな才能の一つだから。そしてその対面に座る天衣を見て、僕は安堵するような心持でいた。

天衣の顔には、勝ったことへの喜びも、ギリギリの勝負を切り抜けた安心感も無かった。そこに見えるのは、優勢な将棋をあと一歩まで捲られた悔しさ。それと同時に、盤の向こうへ向けた、僅かな畏れに

も似た感情。——天衣にも、同年代で競い合える相手が見つかったんだな。

今日の試験において、天衣はC1クラスでの研修会入会を認められた。あと一つ昇級することが出来れば、天衣は女流棋士の資格を得ることが出来る。

## 山刀伐研究会

しとしとと長く雨が続く日だった。僕は喫茶店の角のテーブルに着いて、窓から薄曇りの空を眺めていた。店先の植え込みの葉を、雨粒が揺らすのを数えて、百を超えたところで面倒になってやめた。

今日は月に数回開催する、八一との研究会の日だった。研究会は、棋士同士で行う勉強会だ。本来ライバル同士である棋士が何故共同で勉強するのかと思うかもしれないが、将棋は自分だけで深く掘り進めると、考えが単調になったりするものだ。他人の考えや発想を取り入れることで、将棋に幅が出てくる。

この研究会、いつもなら雨が降ったら日にちをずらしたりするものだけど、今日はどちらからもその提案は出なかった。互い、重要な対局が近く控えているから。

八一は関東のA級棋士、山刀伐八段との対局を控えている。八一としては、三連敗中の相手だ。僕は二年前、お互いがまだB級1組に所属している時に順位戦で山刀伐さんとは対局しているから、その経験を頼みにしたいところだろう。それに僕としても、今年のA級順位戦で戦うことになる相手だ。ここで彼を研究することは、僕にもメリットがある。

しかし、僕にとってそれは、副次的な理由でしかない。僕がこの研究会を今行っておきたい理由……それは、名人との対局が近いからだ。先日行われた棋帝戦トーナメント準決勝戦で勝利した僕は、挑戦者決定戦へと駒を進めることになった。そしてそこで待ち構えているのが、かの名人である。今年の名人戦で四連敗した相手。そして、山刀伐さんの研究パートナーでもある。棋風も近い。ここで山刀伐さんを研究することは、間接的に名人の研究にも繋がるはずだ。

待つこと数分、八一はやってきた。お待たせ、と言う八一に、今来たところだと返す。嘘だ。ただ何となく定跡通りに返してみたんだけど、言ってから気持ち悪かったかなと思った。

八一が席に着いてズボンの裾を拭っている間に、僕は鞆からビニール盤とプラスチック駒を取り出して駒を並べておく。他のお客さん

もいる喫茶店などでは、駒音が響く木製の盤駒は遠慮することが多い。

互いに準備を終えると、いよいよ将棋を始める。まずは10分切れ負けで一局指して頭のウォーミングアップを済ませてから、八一の提案で山刀伐八段の最近の棋譜を並べることになった。山刀伐さんは居飛車中心ながら振り飛車も指しこなし、最新の研究に明るい序盤のスペシャリストだ。序盤で抜け出して、中終盤はそのリードを保って勝つタイプ。棋界随一の研究者とも言われ、その知識量を買われ、名人主催の研究会に呼ばれることになったという。

そんな山刀伐さんの棋譜を、あーでもないこーでもないと検討する。すると唐突に、八一が妙なことを言い出した。

「山刀伐さんと対局して、変なこと言われたことない？」

変なこと？ 記憶の中の山刀伐さんの言動を探る。特にこれと言った思いつくことはなかった。

「どんな？」

「ずっと君の事考えてる、とか」

「お前のご研究してるってことじゃない？ 別に変なことでもないでしょ」

「いや、そうじゃなくて」

言いずらそうに八一は眉を顰めている。そして何かを思い出したかのように身震いした。

「なんか、同性愛者……みたいな」

何を言っているんだこいつは。

「お前、先輩に向かって何言ってるんだよ」

「マジなんだって！ なんていうか、狙われてるみたいな怖さがあるんだよ！」

「お前な、仮にそうだとして、今は性のマイノリティにも寛容になろうって時代なんだから。将棋界の顔たる竜王が、そんな同性愛への差別みたいなこと言うんじゃないよ」

もう、ただの木っ端の棋士じゃないんだ。一気に成り上がったこいつからすればまだその自覚も持ち辛いんだろうけど、そろそろ棋界最

高位の棋士としての立ち振る舞いを覚えてもらわないと。

「蒼天は、山刀伐さんと対局時に何もなかったのか？」

「ないよ。挨拶と感想戦以外、なにも喋ってないよ」

というかあの対局はA級昇級をかけた一番だったし。山刀伐さんは投了を告げた後、暫くうつむいたまま動かなかった。悔しさを押し殺していたんだろう。しかし、毅然とした表情で顔を上げてからは、そんな様子を微塵も見せずに二時間、感想戦を行った。尽きることはない変化手順を熱心に検討していた。彼の示す変化に、僕は悉くこちらが有利になる応手を示した。普通だったら、所謂『感想戦で二度負ける』と言われる状況に落ち込むところだ。しかし山刀伐さんは違った。「こんなに若くて強い子が居るなんて……しゅつこいよお」と、二十歳以上も若い僕の将棋から何かを吸収しようとしていた。強い人だと思った。将棋もそうだけど、何よりも心が。

「あの人の将棋に対する情熱は凄いよ。棋士として尊敬できる人だ。そんな人に対して、変な噂を流すなよ」

僕の言葉に、八一は戸惑った様子ながらも頷いた。まったく、山刀伐さんがどうしたって言うんだ。

それから数局、山刀伐さんと名人の棋譜を検討して、将棋は切り上げた。今は雑談タイムで、話題は弟子について。彼の弟子の家事スキルが高いこと。毎日の食事が楽しみなこと。それによって竜王獲得後に陥ったスランプから脱出し、今は好調だということ。将棋界では、新婚の棋士が生活の安定によつて好調になることがよくあり、新婚ブーストと呼ばれている。それと似たようなものなのかな。

「将棋の才能も凄いし、本当によくできた弟子だよ。そっちはどうなんだ？」

「最近料理の練習を始めたらしい。まだ簡単な物しか作れないけど、この前初めて手料理を食べたよ」

「そんなこと聞いてないって。将棋の事だよ。将棋」

「こいつ……自分はさんざん自慢話してきたくせに……」

「この前C1で研修会入りした。Dクラスくらいかなと思ってたんだ

けど、結構高く評価してもらったみたい」

「おお、女流入りまであと一歩じゃん。マイナビには出る？」  
「本人にはまだ聞いてないけど、多分出るね」

マイナビ女子オープン。アマチュアまで広く門戸を開かれた、女流最大級の棋戦だ。アマチュア含む予備予選から始まり、予選トーナメント、本選トーナメントを経て女王のタイトルへの挑戦者を決める。天衣にとって最大の目標である女王位を巡る棋戦だ。当然出場するに決まっている。

「まあ、そうだよなあ。女流棋士になる最短ルートだもんな」

女流棋士になる最も一般的な方法は、研修会で指定のクラスへ上がること。ただ、それを待たずにショートカットする方法もある。それが、アマチュアも参加できる女流タイトル棋戦で、本選トーナメントベスト8に残ることだ。マイナビ女子オープンは、四つあるその棋戦の一つ。

そういえば、と一つ疑問が浮かんだ。現女王のタイトルホルダーは八一の姉弟弟子の銀子ちゃんだ。もし弟子が挑戦したとしたら、どちらを応援するんだろう？

「もしお弟子ちゃんが挑戦まで漕ぎつけた場合、銀子ちゃんとどっちを応援するの？ やっぱ銀子ちゃん？」

「え？ いやいや俺の弟子まだアマチュアだよ？ あわよくばベスト8とは考えてるけど、挑戦まで行くのは流石に夢見すぎでしょ」

まあそうか、と頷く。僕は正直天衣ならもしかして……と思っただが、身内贔屓が過ぎるのかな。自分の弟子で妹となると、どうも冷静な判断が出来ないみたいだ。

「俺たちにできることは、弟子が少しでも力を発揮できるように導いて、あとは本番で祈るだけさ」

「流石、僕よりほんの少し師匠歴が長いだけある。良いこと言うじゃないか」

生意気だったかな？ と言う八一に、二人で笑い合う。ひとしきり笑い終えた後、八一は弟子が待つてるから、と席を立った。

「おう。次は弟子たちも連れてきてやろうね」



「そうだな。まあ、まずはお互い目の前の山を越えてからだな」

「健闘を祈るよ」

「互いにな」

座ったままの僕と立ち上がった八一。ごっつ、と拳をぶつけ合って、彼は店を後にした。

## 棋帝戦挑決

棋帝戦挑戦者決定戦トーナメントは決勝戦。勝った方が棋帝戦挑戦者に名乗りを上げる大一番だ。しかし僕にとっては、タイトル挑戦以上のもを背負って戦う、プロ棋士としての今後を占う分水嶺になる。相手が、よりにもよって名人だからだ。

この25年間、将棋界はこの人の支配下にあつた。月光先生が棋界の覇権を掴みかけた瞬間、彗星のように現れたこの人がその才能の輝きで、新しい世界の秩序を作り上げてしまったんだ。

その長きに亘る絶対王政下でも、常に革命分子は蠢いていた。期待の若手と目されていた若い才能が次々と決起した。しかし彼はその全てを叩き潰し、将棋界の王座に座り続けた。名人の加齢と共に将棋界は世代交代していく。時計の針を進める者を、ずっと将棋界は探している。

そんな中、現在『棋界の次代を担うと目されている期待の若手』の椅子に座っているのが、二人の中学生棋士……僕と八一だ。早熟さこそが才能を測る最大のツールであるこの世界に、史上五人目、六人目の中学生棋士として門をくぐった僕らは、勢いそのままに幾つかの最年少記録を更新した。僕は全棋士参加の棋戦優勝と名人挑戦、八一はタイトル獲得だ。

八一はまだ名人と対局したことは無いけど、僕は名人戦で四連敗で敗れている。その時はまだ言い訳が立った。初のタイトル戦、慣れない九時間という持ち時間、相手が絶対王者であるプレッシャー。でも、ここで負けて連敗を5に伸ばしたら、流石に他の棋士からの見方も変わってくるだろう。——こいつも、かつて多くいた『元期待の若手』の域を出ないんじゃないか？

棋士として生きる上で、他の棋士からの評価や信用は非常に重要な要素だ。価値が無いと見られればVSや研究会にも呼んでもらえなくなるし、終盤が弱いと見られれば対局中の最終盤でクソ粘りされやすくなる。「自分は自分の負けをだいたい読み切ったけど、自分より弱いこいつなら間違えるかもしれない」……ということ。

僕はありがたいことに『開闢以来の天才』なんて恐れ多い異名を頂いているけど、結果が出なくなれば手のひらなんて簡単に裏返る。ちよつと負け続けられず『元天才』『墜ちた才能』だ。いや、今も名人戦の結果を指して、ネット上で僕をそう呼ぶ人たちも多少はいるらしいけど。

だからこの対局は、僕にとって文字通り試金石になる。僕は自分の価値を主張しないといけない。名人の後を襲うのは自分なんだと。師匠が奪われた棋界の冠を、自分が取り戻すんだって。

『お願いします』

『お願いします』

九頭竜八一はモニター越しに対局者の二人を見つめる。隣には彼の姉弟子である空銀子、検討用の将棋盤を挟んで向かいには玉将のタイトルを持つ生石充が座っている。場所は関西将棋会館の棋士室。東西関わらず公式戦がある日は誰かしら棋士や奨励会員が棋士室で対局中の将棋を検討しているが、女流も含めてタイトルホルダー三人が集うというのは、いつにも増して豪華な顔ぶれと言えた。

将棋は角換わりのオープンニングとなった。先手夜叉神の初手2六歩に対して後手名人は8四歩と応じた。この手で戦型選択は夜叉神に委ねられる。互いに角道を開けてから、夜叉神は8八に銀を上 گرفت。角交換に備える手。

ここで名人は数分時間を消費して考える。そして指された手が――4四歩。棋士たちは騒めいた。

「名人が、角道を閉じた!? 雁木!」

「名人が若手の得意形を避けるなんて珍しいですね……それほど蒼天を恐れているのか、それとも雁木にとっておきの研究があるのか」

通常、名人は対局相手の得意戦法を避けることは少なかった。それは相手の最新研究を吸収するためとも、単にそれで勝てるからとも言われている。

「蒼天くんからしたら予想外?」

「多分想定してなかったんじゃないかと思います。名人戦の時は毎回蒼天の戦型志向に乗ってましたから」

銀子の問いに、八一が答える。その間もパタパタと手が進み、八一は一人で継ぎ盤を操作して盤面を再現する。

「生石さんはどう思います？ 名人の角換わり拒否」

モニターをじつと睨んだままの生石に、八一が問いかける。視点を固定したまま生石は答えた。

「名人が主導権を握ったな。仕掛けの権利を握って、既に後手持ちと言っていていいだろう」

「あ、いやそうじゃなくて。名人とタイトル戦を戦った生石さんなら、名人の意図もわかるかなと思っただけですけど」

「何が何でも勝つ。そう主張してるに決まってるだろ」

八一と銀子は首をかしげた。この対局、この棋戦にかかっている記録があるのだったかと記憶に検索をかけるが、ヒットする情報は何もなかった。

「それだけ、この棋帝戦に懸けてるってことですか？」

短く強く息を吐いて、生石は小さく首を振った。

「潰しに行ってるんだ、蒼天を。今のうちに叩きに叩いて苦手意識を植え付けて、若い芽を摘んでおこうってな。名人は今まで何人もの将来を囑望された若い棋士と対戦しているが、ここまで明確に意思を見せたのは、初めてだ……むかつくぜ」

どうして、と八一は言った。複数の意味を込めた問いかけだった。何故名人が蒼天を潰そうとするのか。何故生石は怒りを抱いているのか。その怒りは何に向いているのか。しかし生石はその問いに答えなかった。やはり画面を睨んだまま、口を真一文字に閉じている。

八一もモニターに視線を移した。史上最強と呼び声高く、自身の憧れでもある棋士と、幼少期からずっと背中を追いかけてきたライバルが、盤を挟んで相対している姿が映し出されている。生石の言葉を飲み込んで……瞬間、胸に重い粘性のなにかが流れ込むような錯覚を受けた。目を逸らしちゃいけないと思った。胸を潰すような、鈍い痛み

に耐えながら。

「(ゴ)じゅうびよう……いち、に、さん」

対局室に、秒読みの声が響く。僕も名人も、持ち時間は全て使い切った。互いに1分将棋となった中、僕の玉は盤の中央に円を描くように逃げ回る。荒波の海に放り出されたかのように、上も下もわからないまま空気を探して藻掻いている。

僕はめいっぱい時間を使って考えているのに対して、名人はほぼノータイムだ。僕に思考時間を与えてくれない。酸素はどこだ。藻掻く。藻掻く。苦しい。負けたくない……。自分の読みとカンだけを頼りに、祈りのような手を重ねていく。

白玉を敵陣に深くにトライしたいが、後手は上から押し潰すように金銀で圧力をかけてきて、入玉を許してくれない。浮き上がりかけた僕の玉を、下へ下へと沈められる。始め自陣左翼にいた玉は、盤中央に放り出された後自陣右翼に着地した。入玉は出来なかったけど、まだ駒が残ってる右翼陣に居れば、まだ戦える！　ここまでノータイムだった名人の指し手が止まる。ここで考えるということは、直前の局面ほど自分が優勢とは思っていないということか？　その考えが、僕に粘る力をくれる。

名人が僕の銀を拾っている間に、僕が敵陣に角を打ち込む。次に相手の急所に馬を作る狙いだ。対応する名人の手は、迷ったように空中を彷徨った。着手は3三銀。手堅い受けの、激辛な手。まだそっち優勢なんだから攻めてきてくれよ！

後手の玉頭に歩を打って、何とか攻めを繋げる。敵玉を中段まで引つ張り出しはしたが、ここから手が続かない。脇息を引き寄せ、抱きしめるように体を預ける。白玉はまだ不安定だ。ここで何か、何かないのか……。

瞬間、雷に撃たれたかのような衝撃。体が跳ねる。頭が一瞬で真っ白になる。眩んだ思考が少しずつ戻るにつれ、浮かんだ順に間違いがないか確認する。手の震えをなんとか押さえつけ着手する。歩頭に桂を打つ、2五桂。同歩からの3七桂が、詰めろを掛けながら白玉の

上部を守る攻防の一手！ 受けられるも連続して詰めるの手が続く。これは逆転したはず！

名人は駒台に手を伸ばす。投了の合図だった。反射的に僕も頭を下げ返し、パンクした浮き輪みたいに脇息にへたりこむ。1分将棋で何手指したんだ？ 勝った喜びなんて感じられないくらいなの、とんでもない疲労感……。

疲労困憊の僕と違って、名人はすぐに感想戦をしたがった。この人、どんな体力してるんだよ……。ただ、二人で対局を検討している間、名人は本当に楽しそうで、将棋への深い愛が伝わってきた。この人が長年トップに君臨し続けられる理由を垣間見た気がした。将棋は愛情。

感想戦を終え、上位者の名人が駒を仕舞い、両者一礼する。未だに笑う膝を一喝してなんとか立ち上がるとする僕に、名人が手を差し伸べてくれた。お礼を言いながらその手を取って立ち上がる。正面の名人と目が合った。ふと、あの名人と向かい合って手を握っているというシチュエーションに気が付いて妙に緊張する。

何故かドギマギしている僕に、名人の方から口を開いた。——これからも面白い将棋を見せてください。また指しましょう。

反射的にはいと答えるしかなかった僕に、名人は満足げな笑みを浮かべて手を放し、対局室から去っていった。僕が将棋会館から出たのは、その数十分後だった。溢れそうになる様々な感情が、落ち着くのを待たなければならなかったから。

## 薬指

喧噪溢れる午前10時の商店街を、天衣と手を繋いで二人で歩く。いや、手を繋ぐという表現は少し間違っているかもしれない。天衣の手は小さくて掌同士だとうまく握り合えないから、僕の薬指を握る形になる。これ、ふとした拍子に指を引つ張られたりすると関節が抜けそうな感じがしてすっごい嫌なんだけど、この子は昔からこのスタイルがお気に入り。

左隣に視線を移す。僕の肩により少し低いところにある頭。視線を感じたからか天衣がこちらを見上げる。

「あれ、背伸びた？」

「お兄さま、それ先々週も言ってたわよ？ そんなすぐに身長が変わるわけないじゃない」

「そうだっけ。いつもより頭の位置が高く感じたんだけどな」

「ふふ、おじいちゃまと同じこと言ってる」

口に手を当てて目を細める天衣。それって、遠回しにじじくさいって言われてない？ 昔通っていた道場の席主を思い出した。会うたびに「背え伸びたか？」って聞いてくるおじいさん。僕、週一で通ってたんだけど。「歳を取ると若者の成長が眩しいんだ」って言ってたっけ。正しく今の僕である。もうその域に足を踏み入れてしまっただか、まだ18歳なのに。

「大人びてる、と解釈しておいてくれ」

「承知いたしました。お師匠さま」

二人して笑い合う。そうして歩いてるうちに商店街のただ中、目的のアパートが見えた。

今日は八一との研究会の日。場所は八一の部屋だ。僕らは将棋会館の徒歩圏内で部屋を探したから、畢竟互いの家も近くなる。10分も歩けば互いに行き来できる距離だ。それでなぜ普段は喫茶店で将棋を指すかといえれば、単純にケーキとか食べたいから。棋士はだいたい甘党である。

八一の住むアパートに到着した。階段を上って二階にある、八一の

部屋のインターホンを押す。扉越しにコンビニで聴きなれた電子音が聞こえる。続いて軽い足音。ドアが開いた。

「初めまして夜叉神先生、こんにちは天ちゃん！ いらっしやいませ！」

扉の向こうに居たのはどこか見覚えのある女の子。確か研修会の……。

「あいじゃない。どうしてここに？」

天衣が言った。そうだ。天衣が研修会の入試で最後に指した子だ。やたら終盤の踏み込みが鋭かった子。この子が今ここに居るってことは……。

「今日はお世話になりますっ！ さ、おあがりください」

八一の弟子に先導され和室に通されると、そこに二つ並べてある将棋盤と、駒を磨いている八一がいた。

「お邪魔しまーす」

「お邪魔致します。夜叉神天衣と申します」

声をかけると、八一は手を止めて僕と天衣を交互に見る。

「いらっしやい。天衣ちゃん、でいいかな？ よく話は聞いているよ。よろしくね」

「師匠ともどもお世話になります。九頭竜先生」

すっかりしてゐるなあ、と八一は声を漏らす。続いて、あんまり兄とは似てないな、とも。それは見た目の話か？ それとも僕がだらしないってことか？

「紹介するよ。弟子の雛鶴。研修会はD1で、天衣ちゃんとも指したことあるって。あい、ご挨拶しなさい」

「雛鶴あいつもうしますっ！ ご指導よろしくおねがいます！」

雛鶴さんの背中に手を添えて、八一が挨拶を促した。元気いっぱいな女の子だ。こちらこそ、と返答する。

自己紹介を終えたところで、八一は弟子たちに語りかけた。

「俺たちはよく、互いの師匠に連れられて一門で練習将棋を指したんだ。それがきっかけで今も、蒼天とは互いに意識し合う関係になってる」



話しながら僕は視線を向けられる。なにか表現に引つ掛かりを覚えないでもなかったけど、とりあえず頷いておく。

「君たちにも、互いに意識して高め合う関係になって貰えればいいと思う。さあ、指そうか」

八一は挨拶を終えると、向かって右の盤の前に腰を下ろした。いきなり何を言い始めるかと思えば、今のは何の宣誓だったんだ。台詞、考えてたのかな。とりあえず僕も倣って彼の正面の座布団に着座する。弟子たちももう一つの盤を挟んで向かい合った。そして何か合図をするでもなく、僕たちは将棋を指し始めた。

今日は事前に局面を指定してあって、角換わりの研究を行う。本局は腰掛け銀の最新型になった。お互い持ち時間1時間で最後まで指して、局後に読みや状況判断を披露しあい、検討する。

「桂跳ねたところあったろ？ 代えて歩叩いてたらどうかかな」

先手番だった八一が仕掛けについて訊ねてくる。僕にとっても読み筋の一つではあった進行だ。

「取って取って取って飛車走って金上がった？ その後は？」

「角打って」

「あー、いやでも打ち返して成り込み合えば後手指せるだろ」

「いやなんで攻め合うんだよ。激しすぎだって」

普通、対局後の感想戦は盤駒を使って盤面を再現して行われるが、それらは観戦記者や中継視聴者への配慮に因るところが大きい。大抵の棋士は頭の中に将棋盤を持っているから、仲間内で指すときは大抵口頭で済ませる。知らない人が聞くと何の呪文だって感じるだろうけど、棋士はだいたいこれで通じ合える。感じる事が大切だ。

一通り変化を検討したところで、この一局は切り上げることにした。伸びをして、この一局で凝り固まった筋肉を解す。

ふと、時計を見ると14時になろうとしている。対局中は集中していて感じなかった空腹だが、時間を意識した途端に腹の虫が騒ぎ出した。

「八一、昼食どうする？ 出前でも取ろうか」

「昨日の残りのカレーがあるけど、それでよければ食べるか？」

「カレー！ いいねえ。ご馳走になります」

昼食にしよう、と隣の盤に視線をやると、集中して全く話を聞いていない様子の天衣と雛鶴さん。局面を見るとまだ中盤戦だ。これはまだ時間かかりそうだな……。

暫くは空腹と戦う必要がありそうだとげんがりしていると、盤の対面に座ったままの八一が口を開いた。

「天衣ちゃん、相当強いな。身内鼻肩かも知れないけど、あいに勝てる同年代の女の子は居ないと思ってたよ」

言葉を聞いて、思わず苦笑が漏れる。師が、弟子を高く見積もってしまうのは皆同じらしい。仕方ないよね。愛弟子だもん。

「僕も同じこと思ってた。天衣と対等に戦ってくれる子は居るのかって。僕にとつての八一みたいなの」

言ってから、少し後悔した。本人を前に言うのと流石にちよつと照れる気持ちがある。それは向こうも同じのようで、むずがゆそうな、妙に歪な笑顔をしている。互いの変な表情を見るともうこらえきれなくて、男二人で盛大に笑い合う。気持ち悪いなど言い合って。

ひとしきり笑いあってから、また八一から口を開く。

「蒼天、あいのこと知ってたのか？」

「うん、知ってたけど」

それが？ と問う。

「いや、普通あいの年齢であの将棋の内容だと驚かれるんだ。なのに全然驚く様子が無かったからさ」

いやびつくりしたけどね。初めて見た時は。

「天衣の研修会試験見に行った時、雛鶴さんが対局相手に指名されたんだ。終盤が凄く鋭くて、荒々しい将棋だったからよく覚えてる」

荒いのはまだ勘弁してくれ、と八一は両手を挙げた。聞くと、まだ序盤の定跡については殆ど教えてないらしい。定跡知識なしで横歩取り指してたのか。……凄い読みの力だ。

「八一も、天衣のこと知ってた風だったじゃない？」

「ああ、ちよつと前にあいから、どうしても勝てない強い子がいるって

聞いててさ。そんでその子の名字が夜叉神ときたら、誰にでも想像つくさ」

それはそうか、と頷く。……いや、そんなことよりも。初めに玄関で彼女を見た時から、ずっと気になっていたことがある。聞いていいものかと悩んでいたが、言ってしまおう。

「どうかさ、前に言ってた内弟子って女の子だったのね。お前大丈夫？ 世間的にやばくない？」

そう問うと、八一は急に疲れたような顔をして、それは言うなと手を振った。既に九頭竜ロリコン説は割と真実味をもつて将棋界内外に拡散されているらしい。哀れ八一。強く生きろ。

弟子たちの将棋が終わり、僕たちが食事にありつけたのは15時を回ったころだった。

「どうぞ、召し上がって下さいー！」

配膳されてきたカレーライスを見て、隣に座る天衣がえつと声を上げる。それもそのはず、どす黒いカレーソースと、皿の端に盛りつけられた千切りのキャベツ。そして使う食器はフォーク。こ、これは……！

「金沢カレーじゃないか！」

「蒼天、知ってるんだ」

「レッツゴーカレーって金沢カレーのチェーン店があつて、奨励会時代よく通ったんだ。これ作ったの八一じゃないよね、雛鶴さんが作ったの？」

「はい。実家が石川なので」

いただきます、と呟いてフォークを口に運ぶ。口に含むと、ソースにかなり粘性があることが分かった。そして口いっぱい広がる甘み、クリーミー、スパイシー。うわ、超美味い。こんなところで本場の味を堪能できるなんて、感動する。

今まで食べたベストカレーは名人戦の昼食に頼んだやたら高そうなビーフカレーだった。こすったら魔人が出てきそうな容器に入っ

てて、高級感アピール凄いな、なんて思った。実際美味しかったけど。でも彼女のカレーはそれを軽々超えていく美味しさだった。カレーを口に運ぶ手が止まらない。額から汗が流れ落ちるが、そんなことよりフォークを止めたくない。

米一粒残らず平らげるまで、十分とかからなかった。あまりの美味しさに放心状態にある僕に対して、雛鶴さんは何故か徳の高そうな笑みを浮かべていた。「初めて食べた時は俺もそんな感じだった」と、八も苦笑している。

「雛鶴さん！ これどうやって作ってるの!? レシピ教えてよ！」

「ふふっ、これはですね？ きぎよーひみつですっ」

「いいじゃんさ、頼むよー！」

「そういわれてもー」

「そこをなんとか！ お願いします！ この通り！」

手を合わせて頭を下げる。額が卓袱台に触れた。お願いします！

必死に懇願する僕の左隣から、わざとらし気な大きい溜息が聞こえてきた。姿勢をそのままに顔だけ左に向けると、汚物を見るような目で僕を見下ろす天衣がいた。

「師匠？ 弟子の前でそんな情けない姿を晒すなんて、みっともないと思わないのかしら？ 仮にもA級棋士が小学生相手に頭を下げて……はあ。しかも、頭下げてる相手も将棋関係者なんだけど？」

仮じゃなくてまさしくA級棋士なんだけどな、という突っ込みは、胸の中にだけに留めておく。

「そんなにレシピが知りたいなら私の方から聞いといてあげるから、さっさと頭を上げなさい。恥ずかしくないの？ 私は恥ずかしいわ。師匠の恥は弟子の恥だもの」

弟子にボロクソ言われて渋々頭を上げる師匠である。僕の言われっぷりを見て八一が大笑いしている。くっそ、今度ロリコン弄りされてるところに出くわしたら笑い返してやるからな！

## 詰将棋、意味ないです

すっかり日が暮れて研究会も終了して、八一の発案で近所のファミレスで夕食を摂ることになった。因みに師匠組による厳正なる一分切れ負け将棋の結果、支払いは僕が持つことになった。その負け方がなんと二歩。最終盤、時間が無くて焦って打った底歩が禁じ手だった。弟子の前で反則って超恥ずかしい……。

夕食時には少し遅い時間だが、店内は賑わっていた。ボックス席に案内され、師匠組と弟子組が並んで席に着いた。僕と八一はおろしハンバーグ、天衣はクリームパスタ、雛鶴さんはオムライスを注文した。料理を待つてる間、雛鶴さんが天衣にじやれついで遊んでいる。天衣は始めのうちはいややめと抵抗していたけど、ついに捕まって肩を抱き寄せられてからは諦めたのか大人しくなった。そういうえば、天衣が同年代の子と遊んでる姿ってほとんど見たこと無かったかも。実年齢よりだいぶ精神年齢が高い妹だけど、ちゃんと同級生に友達いるんだろうか。自分の事を棚に上げて心配になる。

天衣と視線がぶつかった。羞恥と抗議が混じった表情。助けを求められているのかな。すまん、兄は妹が友達と遊んでる姿を見られて嬉しいんだ。

「蒼天は、天衣ちゃんにどんな指導してるんだ？」

妹の年相応な部分を見て喜んでいると、隣の八一が訊ねてきた。

「普通に平手で指導対局したり、ハンデ付けて本気で指したりとかかな。どうしたの急に」

「いや、師匠として、弟子への指導法として良いアイデアないかなって」

「お前だって子供の時から清滝先生に教えてもらってたんじゃないの。同じこととしてあげればいいじゃない」

「うちの師匠は見て技を盗めって考えの人だったから……」

確かに清滝先生はそんなこと言いそうなイメージがあるな。昔堅気の職人タイプだから。

「僕は、指導対局が中心かな。一局通して指して感想戦で指摘事項を一気に伝えることもあるし、指した手に対してその場で評価を伝えることもある。あとは、ハンデ付けて本気で対局するとか」

八一が首をかしげた。気が付いたら弟子チームの二人もこちらの会話に注目している。

「ハンデ？ 駒落ちってことか？」

「いや、平手で。今はソフトで形勢判断を数字で評価してくれるじゃない？ 自分たちの棋譜をソフトにかけて、評価値で差が付いた局面から対局するんだ」

個人的にはソフトの評価値は自分の大局観とかなり近くて、今まで他の棋士に変態呼ばわりされて理解してもらえなかった形勢判断も、ソフトによってだいぶ肯定的に見られるようになった。棋士の中にはソフトと感覚が違いすぎて自分の将棋に取り入れられないって人もいるみたいだけど、僕の将棋とはかなり親和性が高かった。ソフトには勝手に仲間意識を抱いている。相手は無機物だけど。

「たとえば、評価値2000点分の差がある局面で、僕が劣勢側を持って指す。この条件なら僕も本気で指せるから勉強になるし、中終盤の粘り強さなんかも身に着くだろう」

あと、駒落ちより実践的な局面で戦えるし。自分としては、かなり良い勉強法だと思ってる。

「そちらは？ なんかことやってるの」

こちらからも訊ねる。八一は、詰将棋の早解き競争や指導対局、研修会の棋譜の添削と答えた。オーソドックスというか、よく知られる基本的な勉強法だな。

「詰将棋、効果ある？ 僕、詰将棋苦手だし、それに現実離れた手順のやつ解いても指し将棋にあんまし役立たないと思うんだけど」

単手数や実践系の問題ならいいんだけど、詰将棋って問題レベルが上がってくると曲芸みたいな手順になる作品が多いんだよね。師匠の月光先生が著名な詰将棋作家で作品集も出してるから、義理で解いてみたことがあった。意表を突く手順とか詰め上がりの形とか、芸術性が高いってことは理解できたけど、正直解くのは苦痛だったし、自

分の棋力が向上した気もしなかった。

「うーん、今は結構詰将棋否定派の棋士も多いよな。俺は昔から、一人でする勉強と言えば詰将棋って教わってきたから。もうやらないと落ち着かないっていうか」

「そういうものか」

失礼しますと僕らに声がかかって、店員さんが料理を運んできた。先に天衣の Pasta、次いでオムライス。最後に僕らのハンバーグが届く。皆で手を合わせて、料理に手を付ける。

「八一、桂香さんってマイナビ出るよね？ チャレンジマッチから？」

ハンバーグを切り分けながら、僕は八一に聞いた。八一は肉より先に付け合わせのコーンをやっつけているところだった。

「出るけど、どうして？」

「桂香さんと雛鶴さん、一緒に東京に行くことになるよね？ なら、そこに天衣も一緒にさせてもらえないかと思って。一応家の者も付いていく予定だけど、桂香さんが居れば心強いから」

桂香さんは清滝先生の実の娘さんで、八一の妹弟子にあたる。この兄弟弟子は入門した順番は銀子ちゃん、八一、桂香さんだけど、年齢はその逆なんだよね。もし僕が銀子ちゃんの立場だったら、10歳以上年上で師匠の実の娘の妹弟子ってすごい気まずい関係だと思うんだけど、ここの姉妹は大変仲がよろしい。

それに、桂香さんは今も研修会に所属しているから天衣とも面識があるはずだし、マイナビ自体の参戦経験も多い。勝手知ったる彼女に付いて貰えれば、僕としては安心だ。

「たぶん大丈夫と思うけど、聞いとくよ。マイナビには俺も付きそうつもりだし」

「なんだ、お前も行くのね。僕は順位戦と棋帝戦があつて見に行けそうにないからさ。邪魔でなければよろしく頼むよ」

今週は順位戦の開幕局があるし、その後も棋帝のタイトル戦と重要な対局が多く控えている。そこに各棋戦の予選なんかも絡んでくるから、天衣に構ってやれる余裕は無くなるかも知れない。少なくともマイナビの予選は付き添ってやることは出来ないだろうな。棋帝戦

の真っただ中だし。

僕のお願いに雛鶴さんは前向きな様子で、「天ちゃん、いつしよに行こうね!」と言ってくれている。しかし天衣は不満そうな表情だ。

「一つの挑戦権を巡って争う相手同士なのに、ここで馴れ合っても味が悪いんじゃないの?」

確かにその疑問は尤もだ。ハンバーグを咀嚼している僕に代わって、八一が質問に答えてくれた。

「確かに最終的には対戦するかもしれないけど、俺たちは同門なんだ。言わば親戚みたいなもので、協力し合って皆で上を目指した方が互いにメリットもあるだろう?」

まだ天衣は納得していないようだった。ハンバーグを飲み込んで、僕からも問いに答える。

「棋士同士の関係ってというのは、結局は利用し合いだ。互いにメリットがある時は協力し合えばいいし、そうでないときは距離を取ればいい。ドライな関係だよ。でもだからこそ、無条件の協力関係は大事にしておいた方がいい。味方は多いに越したことはないから」

将棋界は実力主義の社会だから、価値がないと評価されたら誰にも相手にされなくなる。その中で、実力に関わらず協力関係を結べる一門という関係性はかなり貴重だ。棋士にとって、師弟という制度が重要視される理由の一つでもある。

僕たちの言葉に、天衣は渋々といった感じで頷いた。理解はしても、納得はしてないのかな。棋士同士のシビアな関係性は、経験してみないと分からないのかも。



わがまま

負けた。

完敗だった。

言い訳の余地なく、ものの見事に、完膚なきまでに吹っ飛ばされた。順位戦の初戦。二年連続の名人挑戦に向けて、更にもうじき始まる棋帝戦に勢いをつける為にも、獲っておきたい一戦だった。

でも負けた。

序盤から相手の用意した研究手に嵌って、中盤に挽回しようとした手が暴発で、何一ついい所のない将棋だった。感想戦をやるどころすらない。最後までみっともなく粘って踏ん張っても、終局時間は持ち時間6時間の順位戦としては異例の夕食休憩前。

将棋は強い方が勝つゲームじゃない。勝った方が強いゲームでもない。ミスの無い方が勝つゲームだ。そしてそのミスってやつは、人間である以上誰もが逃れられない運命にある。歴代最高の通算勝率を誇る棋士でさえ、10回中3回は負けている。勝てば心は晴れやかだけど、負ければ黒い雨雲に覆われる。酸性雨にうたれるコンクリートみたいに、ビリビリと心を溶かされる。

負けて悔しさを感じない棋士は強くなれない。けど、負けを引きずりすぎる棋士もまた、強くなれない。敗北を消化・吸収して、エネルギーに変換してまた立ち上がる糧にしなきゃいけない。勝負の世界に生きる以上、一生付きまどってくるこいつと、上手く付き合っていく必要があるんだ。

でも、偶にどうしようもなく心を折られる負けつてのも存在する。例えば今日みたいに、悲惨な内容で自分が弱くなったんじゃないかと思わされる将棋とか……。

会館から家まで、徒歩数分の道を我武者羅に走る。スーツに革靴、脇にビジネスバックを抱える人物の全力疾走に、道行く人から不審げな目で見られているのがわかる。でもそんなことは気にしていられない。視線を振り切るように走り抜け。自分の住むアパートに到着

する。

靴を脱ぎ、スーツを脱ぎ捨て、鞆を放り投げる。こんなひどい負け方をした時は、どうしようもなくネガティブな感情がもくもくと煙のように立ち上ってくる。胸から生じるそれはどんだん体中に広がって、いずれ頭に到達すると、怒りという感情に変わっていく。自分自身への怒りだ。何でお前はあんな手を指したんだ。何でお前は弱いんだ。お前が弱いから、僕はこんな思いをしなきゃいけないんだ……自分をぶん殴りたくなる。痛みつけて、とにかく自分をダメにしたくなる。

下着姿のまま、腕立て伏せを始める。普段から筋トレしているわけじゃないから、十数回もやればすぐに腕が悲鳴を上げる。もう限界？ 知るかよ。こんなんじや収まらないんだよ。あんな無様な将棋指しやがって……！

自分に対する怒りの発散法として、筋トレは昔からのルーティーンだった。自分を痛みつける、自傷行為の代替だ。いや、筋繊維を破壊しているから、本当に自傷行為と言えるかもしれない。ついでに体力も付くし、健康にもいい。一石三鳥のストレス発散だ。

腕が上がらなくなると、次は上体起こし。タオルを床に敷くのを忘れたから、尾てい骨が当たって痛い。だけどそれがどうした。負けたお前が悪いんだ文句言うなバーカ。

更に上体反らしも終えて、床にうつ伏せで横たわる。木目のフローリングが冷たくて気持ちいい。激しく上がった息と一緒に、体内の悪い感情が排出されていくような感覚。心地よい疲労感があった。

暫く床で横になっていたら、玄関から物音がした。あれ、誰だろう……誰か会う約束してたんだっけ。

とりあえずこの姿勢、格好じやまずい。そう思っただけで起き上がろうとするも、力が入らない。腕、上がらね……足音が近づいてくる。

「はあ……やっぱりやってるわ。服くらいは着なさい。風邪ひくわよ」

「ご無沙汰してます。蒼天様」

「天衣と、晶さん？」

「ちよつと、この年で、恥ずかしいんだけど」

部屋に上がってくるなり、天衣は僕の頭の下に足を滑り込ませてきた。所謂膝枕だ。僕が起き上がれないのをいいことに。え？ 何この状況？ 天衣の付き人の晶さんが、知らんふりをしながらも、僕たちをちらちら目線だけで伺っている。

「もつと他に恥ずべき事があるでしょう？」

「ちよつ、まだ敗戦の傷新しいからやめて」

「違うわ、下着姿で床に寝転がっていることよ」

しようがないじゃない。人が来ると思ってたなかったんだもの。

「で、この足は何？」

「昔、たまにお父さまに負けた後、お母さまの膝にすがりついて泣いてたでしょう？」

よく覚えてるな……お前そのとき何歳だったんだよ。

懐かしい思い出が胸を過ぎる。記憶の宝箱にしまっておいた家族の風景。でも、今僕が触れているのは母さんじゃないし、今日負けたのは父さんでもない。時の移ろいを感じて、胸に少しばかりの郷愁が差す。

「わざわざ慰めに来てくれたの？」

「ええ。荒れてるだろうと思っただから」

「悪いな。天衣もマイナビが控えてる大事な時期なのに」

マイナビ女子オープン。女王のタイトルをかけて戦う、最大級の女流棋戦だ。天衣にとつての初めて参加する棋戦になる。プロアマ混合の予備予選チャレンジマッチで出場者を選抜し、それを突破すれば一斉予選に参加することが出来る。そして予選を勝ち抜くと16人の決勝トーナメントで挑戦者を決める。

二つの予選はそれぞれ一日すべての対局を行うから、短い持ち時間ながら一日4局とか5局の対局をこなすこともある。殆ど早指しみたいなものだ。この形式は研修会と近いから、慣れという面では大丈夫だろう。

「悪いと思っっているなら、弟子の公式戦デビューくらい応援に来て下

「さらないの?」

「いや、僕もタイトル戦あるから勘弁してくれって」

「三連勝すれば一斉予選には間に合うでしょう?」

チャレンジマッチは対局料の出ない非公式戦だから、勝ち上がれば天衣の公式戦デビューは一斉予選になる。日程的には、棋帝戦三局目と四局目の間だ。

「そんな無茶な……」

タイトルを保持するってことは、七つある将棋界の頂点に立つってことだ。そしてそこに挑む挑戦者は、全棋士が参加する予選を勝ち抜いてきた棋士。当然実力の保証された一流棋士の戦いになるから、拮抗した勝負になることが多い。僕は初タイトル戦でストレート負けしたけどね!

「無理なら、三連敗の方でもいいけど」

「お前、縁起でもないこと言わないでくれ」

天衣の言葉を冗談だと判断して、苦笑が漏れる。でも寝返りをうって天衣の顔を見上げると、その顔は笑っていなかった。

「お兄さま。私の公式戦デビューを、私が将棋の世界に足を踏み入れる瞬間を、お兄さまには見えて貰いたいの」

「天衣」

「これは、ただの私のわがままで、お兄さまにとって負担にしかならないうってわかってるけど、それでも見えて欲しいの」

「ごめんなさい。そう続く天衣の言葉に、僕は深い溜息を吐く。天衣の瞳が不安げに揺れたのが見えた。

「妹にわがまま言われたんじゃ、おにいちゃんはやさしくしてやるしかないなあ」

足を振って反動を使って立ち上がる。疲労した筋肉を労わるようにストレッチをする。体に力が戻っていた。

直後、今まで気にならなかった空腹を感じ、夕食休憩前に投了したため食事がまだだったことに気が付いた。肉が食べたい、と思った。

## 夜風に

『両対局者の入場です。盛大な拍手でお出迎え下さい』

アナウンサーと共に扉が開き、スタツフに先導されて花道の中をステージまで歩く。ホール内には幾つもの丸型のテーブルが配置されていて、そのテーブルに沿って人が並んでいた。

時は棋帝戦一局目の前日。場所は静岡県沼津市の某有名旅館。タイトル戦では、対局の前日に前夜祭が開催されることが慣例になっている。前夜祭とはつまり、将棋関係者やスポンサー、記者に応募してくれたファンが集まるパーティーだ。ステージに上がると、ホール全体が良く見える。今日は結構人が入っているな……名人戦の時と同じくらいいるんじゃないか？

将棋連盟の幹部と主催者のスポンサーから挨拶があり、僕ら対局者が紹介される。その後スポンサーが音頭を取って会場皆で乾杯し、自由な会食の時間が設けられる。

この会食時間こそが、対局者にとっての仕事の時間である。関係者への挨拶回りと、ファンへの対応の時間だ。僕は棋士だけど、この時ばかりは取引先との接待に奔走する営業担当そのものだ。接待の飲み会なんて気を遣いっぱなしで全く楽しくないなんて話をよく聞くけど、今の僕が正しくそんな感じ。いや、飲んではいけないけどね。

スポンサーの方に挨拶に伺おうとしたら、逆方向からも人が近づいてくるのが見えた。対局相手の篠窪棋帝と目が合った。気まずい思いをしながら手で「お先にどうぞ」のジェスチャーをすると、彼はこちらに会釈をして、スポンサーと会話を始めた。

篠窪棋帝……先手で角換わり、後手で横歩取りを得意とする攻め将棋の居飛車党だ。現在23歳と若くして将棋界を担う一人であり、ルックスも良く、名門大学を首席で卒業と天に何物与えられてんだって人。恐らく、今後も長く戦っていくことになる相手だろう。

少し離れた位置で篠窪さんの挨拶が終わるのを待っていたら、あつという間にファンに囲まれてしまった。写真だ握手だサインだと群がるファンを捌いているうちに、ターゲットを人ごみの中に見失って

しまった。

　　というか入場したときから思っていたけど、女性の数が多くない？  
　　ちよつと前まで将棋のイベントに集まる人なんて殆どがオジサン  
　　やお年寄ばかりだったのに、ここ数年で爆発的に若い人や女性の姿  
　　が増えた。今日も3、4割は女性なんじゃないかな。両対局者が若  
　　いってことと、何より相手が篠窪さんって要素も大きいと思うけど。  
　　挨拶回りに行かなきゃいけないけど、流石にファンを振り切るのも  
　　良くない。人だかりの中で戸惑っていると、助け舟は思わぬところか  
　　らやってきた。

「みなさんごめんねー！　夜叉神先生ね？　スポンサーの偉い人たち  
に挨拶しにいかなきやいけないの。もうちよつとだけ待っててね？」  
送り出してくれたのは、鹿路庭さんだった。「たまよーん！」とお客  
さんから歓声上がる。そうか、沼津は彼女の出身地だったんだっ  
け。ここは任せろ、とサムズアップとウイंकを飛ばしてくる彼女に  
礼をして、僕は堅っ苦しい社会人の集まりに飛び込んでいく。

「——自分らしい将棋を指せればと思います。本日はお集りいただき  
ありがとうございますました」

　　対局者の挨拶を終えて、会場を後にする。会食はまだ続くけど、大  
　　抵対局者は前夜祭の時間半分くらいで退出して、翌日の対局に備える  
　　ことが多い。

　　篠窪さんと別れて、それぞれ自分の泊まる部屋に案内される。戦前  
　　に作られたという木造の廊下を歩いていく。一歩ずつ聞こえる床の  
　　軋みが、却って歴史の重みと木の風合いを感じさせた。

　　通された部屋に入ると、統一された木の意匠が目を引き和室だっ  
　　た。大きなはきだし窓から庭を望むことが出来て、中央にある池では  
　　鯉が泳いでいるのが見えた。内風呂を覗くと、なんと檜風呂。すごい  
　　なあ。流石に日本でも有数の旅館と言われるだけはある。部屋の規  
　　模的に、一人で泊まるにはちよつと寂しいけど。写真を撮って天衣に  
　　送ってやる。

　　風呂に入ってから備え付けの浴衣を着て、庭に出て石造りのベンチ

に腰掛け、ぼんやりと夜風に当たっていた。梅雨時期の湿った温い風も、風呂上がりの夜に浴びると心地よかった。

どのくらいそうしていたかはわからない。ふと我に返ったのは、視界の端でちらと人影が映ったからだ。あれは……

「鹿路庭さん？」

「あれえ、夜叉神さんじゃないですか」

近づいて声をかける。振り返った鹿路庭さんの顔は少し紅潮していた。お酒に酔っているようだ。この人がここに居るってことは、前夜祭も終わったのかな。

風に揺られて黒のドレスコードの裾がひらひらと踊っている。同時にお酒に混じって、女性特有の甘い体臭が鼻をくすぐった。

「ああ、先ほどはありがとうございました。ファンに捕まってた時、助けてもらって」

「いえいえ。沼津のファンの人たちなんて、私みんな顔見知りだから」

蕩けたような笑顔で彼女は言った。酔いのせいか、いつもより口調が砕けている。これが素の喋り方なのかな？ いつもより柔らかな雰囲気彼女の彼女に、少しばかりドキリとさせられる。

「こうして地元に戻ってくると、皆すごい喜んでくれるし。今日の宿泊だってね？ 後援会が泊っていけっってお金出してくれて、この旅館も結構値引きしてくれてるみたいで」

あ、彼女今日ここで泊まるんだ。旅館やホテルでのタイトル戦では、対局者や立会人、記録係に現地解説会の出演者なんかは連盟持ちでお金出してくれるけど、地元の人で家が近かったりしたらその場合でないこともある。鹿路庭さんは明日現地の解説に出るんだろうけど、実家に帰るものだと思ってた。

「鹿路庭さんは人気トップクラスの女流棋士ですからね。そりゃ地元からしたら誇らしいでしょうね」

「でも……期待してもらってる分、ちゃんと恩返ししたいの。聞き手やイベントばかりじゃなくて、将棋の成績で」

そう言っつて、唇を噛む鹿路庭さん。棋士である以上、当然将棋の成

績で周囲に認められたいという思いはあるだろう。対局以外の要素でどれだけ持て囃されたって、将棋に勝たなきゃ飢えは満たされない。本来棋士つてもものは、そういう生き物だ。

「まあ、そのうち結果も付いてくるんじゃないですか？ 鹿路庭さん、女流棋士の中ではかなり勉強頑張ってる方だし」

その人の将棋にかける情熱や、どれだけ努力してきたかっていうのは、棋譜を見れば伝わってくる。それは、才能とは一種別のもので、尊いものだ。

「えへへ、本当ですか？ 夜叉神さんに言ってもらえると励みになるなあ」

カラカラと笑う彼女を隣で見る。言ってからかなり上から目線だったかと心配になったけど、流してもらえたみたいだ。

その時、ブブブと携帯が震えた。浴衣の下に履いていた短パン（下着の上に直で浴衣着るとスースーしてなんか嫌じゃない？）のポケットから携帯を取り出し、画面を確認する。天衣からのメッセージだった。

『明日、お兄さまの勝利を信じてる』

短い文章だった。応援……というより、その真意は脅迫だろう。抑えきれずに苦笑が零れてしまった。

「どうしたの？ そんなにやけちゃって。あ、もしかして彼女さん？」

「違いますよ！ 妹です。前に相談したでしょ。あの子です」

携帯を寄越せと迫ってくる鹿路庭さんを躲して、自分の部屋へと退避する。だる絡みの酔っぱらいそのものだ。部屋に戻ってはきだし窓の鍵を閉める。窓の前には頬を膨らませた鹿路庭さんが僕を睨みつけている。僕は手を振って、襖を閉じる。時計を見ると、それなりに良い時間だ。歯を磨いたら、明日に備えて早く寝よう。



## ロケット

「定刻になりましたので、対局を始めてください」

その言葉と同時に、僕たちに大量のフラッシュが降り注ぐ。棋帝戦第一局。僕にとっては、二回目のタイトル戦だ。

棋帝戦の持ち時間は4時間。これは盤王戦と並んでタイトル戦の中で最短となっている。僕としては最も得意とする時間。得意意識そのままに、勢いで押し切りたいところ。

振り駒の結果先手になった僕が、初手に角道を開ける7六歩を指す。駒音を隠すように報道陣のシャッター音が響き渡り、僕はフラッシュで目が眩まないように目をつぶる。

篠窪棋帝の応手は、僕と同じく角道を通す3四歩。もし彼が相居飛車をご所望だったら、横歩取りか一手損角換わりに誘導する手だ。狙いは恐らく、僕も得意とするところの横歩取りで初戦を圧倒すること、シリーズを通してプレッシャーをかけるつもりなんだろう。

でも彼には気の毒だけど、今日はこつちにもとっておきの隠し玉を用意してある。残念ながら横歩取りにはしてやらない。

僕はゆっくりと盤上の歩に手を伸ばした。角道を閉じる、6六歩を着手する。

大盤解説は午後から始まった。局面は中盤に入ったところで、両対局者の方針も見え始めたころだった。

「それでは棋帝戦第一局、大盤解説を始めさせていただきます。聞き手は私……皆の鹿路庭珠代だぜっ！ 皆盛り上がってるかー!!」

会場から大歓声が上がった。元々アイドル的人気を得ている女流棋士ではあるが、地元沼津でのイベントということで、彼女目当ての客も居るようだった。

「そして解説は藤居九段に来ていただきました。先生、本日はよろしくお願いします」

よろしく、と会場の礼をする藤居に拍手が起こる。タイトル経験も

あるベテランで、将棋ファンからの人気も高い棋士の一人である。

「対局者の紹介から参りましょう。まずは篠窪棋帝です！ 藤居先生は棋帝についてどんな印象をお持ちですか？」

「本格派の居飛車党って感じですねえ。角換わりと横歩取りが得意で、若い勢いか押せ押せの攻め将棋の印象です」

「挑戦者の夜叉神八段はいかがでしょう？」

「激しい将棋が大好きですよ。独創的な棋風で、特に名人戦に敗れてからはタガが外れたように暴走に拍車がかかっている気がします」

会場が沸いた。鹿路庭も口を抑えて顔を背けている。暫くして笑いが収まると、鹿路庭は話を続けた。

「では、さっそく局面を見ていきましよう！ 挑戦者の夜叉神八段が選んだ作戦はノーマル三間飛車です！ 先生、これは意表を突いたと言っているんじゃないでしょうか？」

「ええ。篠窪君も驚いたんじゃないでしょうか。夜叉神君はたまに振り飛車を指すこともありますが、三間に振ったのは初めての筈です」

将棋の戦法には、大きく分けて二つの戦法がある。攻めのエースである飛車を右側で使う居飛車と、中央から左に移動させる振り飛車だ。振り飛車は守備的な作戦とされることが多く、それ故プロでは人口の八割以上が居飛車を好む居飛車党だが、アマチュアでは振り飛車の安全性の高さから、人口比は拮抗している。そのため、プロの振り飛車党はアマチュアからの票を集めやすく、人気が高い傾向にある。藤居もそんな棋士の一人だった。

「それにしても、振り飛車になってよかったねえ」

「現地解説の聞き手と解説が振り飛車党ですからね。もしかしたら私たちに気を遣ってくれたのかも」

「ありがたいですねえ。もし横歩になったらどうしようとビクビクしてたんですよ。トップ棋士の横歩なんてオジサンわかんないよ」

再度観客から笑いが起こる。将棋という競技は長時間に及び動きが少ないが故に、その間を繋ぐ高いトーク力も壇上の棋士には求められる。棋士の露出が増えた昨今では、棋士に求められる能力はただ「将棋が強いこと」だけではなくなってきたのだ。

「さあ、後手は大方の予想通り穴熊に組んでいます！ 対して夜叉神八段の陣形はどうでしょう？」

「これは真部流とよばれる陣形ですね。ややクラシクな戦法で、最近ではめつきり見なくなりました」

「どのような狙いがあるのでしようか？」

「相手が穴熊を金銀四枚で固めようとしたら、その隙に中央を制圧することが狙いです」

なるほど、と鹿路庭は相槌を打った。この程度の知識は鹿路庭にもあるが、会場の人たちに向けた解説を引き出すのが聞き手である彼女の役割だ。

「ただ、最近は囲いを金銀三枚で済ませて手数を省略し、穴熊側からも互角に攻め合うことが増えました。となると、囲いは三枚でも穴熊が堅いですから、真部流は指されることが減った訳です」

「なるほど。篠窪棋帝の穴熊に対して挑戦者がどんな対策を用意しているのか、皆さん注目です！」

来た！ 想定通りの展開だ！

振り飛車の天敵である穴熊囲い。現代将棋の振り飛車は、常に穴熊との闘いを強いられてきた。穴熊の前に、さまざま振り飛車の戦法が淘汰されてきた。この真部流もその一つ。ただ、僕はこの戦法に面白いアイデアを思い付いた。

三五歩と突く。銀の前進が狙いの手だけど、同時に桂頭に隙を作るリスクな手でもある。篠窪さんは明らかに怪訝な表情をしながら同步と取り、更に僕から同銀と銀の進出に成功させた。

その後は暫く互いに攻撃陣の整備が続いた。互いの飛車が向き合う盤の左側に戦力を集中する篠窪さんに対して、王様が向き合う盤右側の駒を押し上げていく僕。王様を守る城である高美濃囲いを解体して、金銀を上にと盛り上げる。

相手が左辺での突破を目指しているうちに、こちらは穴熊を狙い撃つロケットを作り上げる。一九にある右香を浮かしてその裏に飛車

をセット。これで第一段階クリア。

更に相手の攻めが自陣に届く前に角を交換する。そして取ったばかりの角を使って敵陣左隅の桂香に狙いを定める。相手は端にいて働いてない桂香を助けるより攻め合った方が良いと判断したのか、龍を成り込んで王手をかけてきた。囲いをバラして攻め駒に投入した分、こちらの玉周りはスカスカだ。一手の判断ミスが、即命取りになる危険な局面。

とりあえず白玉と敵龍の間に歩を打ってバリケードを作ると、相手はその龍で僕側の陣地左下で初期位置に取り残された桂馬を取ってきた。よし！ここで手堅く指してくれるならありがたい。これで僕も敵陣左隅の桂香を拾う時間が作れた！

取った香車をすぐに1六の地点に打つ。これで盤の右上隅で穴熊のシエルターに籠る敵玉を狙い撃つ秘密兵器が完成した。自陣の右端に、香車、香車、飛車が縦に並ぶ三段ロケット！将棋を指した男の子なら誰もが憧れるロマン陣形！

発射スイッチである1四歩を着手する。敵玉目掛けて駒たちが躍動する。穴熊に籠る敵玉に、逃げ道は無い。

休憩と次の一手クイズを挟み、大盤解説は局面の解説に戻った。

「さあ、対局に戻りましょう！ 現局面は……え？ なんですかこれ？」

先に中断した局面から、その後の進行通りに大盤を操作していく鹿路庭の手が止まる。

「高美濃囲いが、どんどん解体されていきますが……藤居先生、どう思われますか？」

「いやー、夜叉神君の変態……いえ、独創性が爆発していますねえ」「挑戦者の狙いは、玉頭戦にあるということでしょうか？」

「そうでしょうけど、これはやりすぎじゃないの？ 王様が自分で城を打ち壊してその柱や瓦を投げて攻撃してるようなものですよ」

引き気味の聞き手解説に対して、観客の盛り上がりは大きかった。

ソフトの台頭によって棋士の将棋内容の個性が薄れつつある中、夜叉神のそれはファンにとって好意的に受け取られることが多かった。

「振り飛車ってのは、捌きと美濃囲いが命なんですよ。でも彼は捌いても美濃囲いも無いわけだから、これはもう実質振り飛車じゃないですわね！」

鹿路庭が言った。投げやりに吐いた台詞だったが、意図に反してドツと会場は沸いた。

「さあ、ここから▲3六銀、△7四飛と進んで……おっと!? ここで▲1七香です! この手はまさか……」

「なるほど、最初から飛車を振り直してロケットを作る心算だったんですね。だから美濃を自分から崩す必要があったと」

「なるほどこれは……夜叉神先生にしかさせない将棋ですね」

「夜叉神変態流ですわね」

先生抑えて! と諫める鹿路庭に、藤居はもう取り繕いようがないでしょう、と答えた。

## 揮毫

三段ロケットは簡単に穴熊を崩壊させ、敵玉を上空に引っ張り出した。そして持ち駒をベタベタ張り付けて行って簡単な即詰みに討ち取った。これで僕は棋帝戦を先勝。タイトル戦には三本先取の五番勝負と四本先取の七番勝負があるが、棋帝戦は五番勝負だ。対局数が少ない分、この一勝の重みの大きい……と言いたいところだけど、僕は天衣からストレート勝ち司令を受けてるから、どのみち全勝以外に道は無い。

篠窪さんが投了を告げる。三手詰の局面だった。もちろん篠窪さんはもつと早く自玉が詰むことに気づいていただろうけど、タイトル戦など中継される注目度の高い対局では、アマチュアにも配慮して、詰みがわかりやすい局面まで指すことがあるんだ。

投了と同時に、対局室から一步出た廊下で待機してたであろう記者たちが、カメラを担いで雪崩れ込んで来た。彼らの八割は篠窪さんの背後に陣取って僕を正面から写し、一割は横から僕ら二人をカメラに収め、最後の一割は僕の後ろから篠窪さんを撮影していた。注目度の高い対局で起こる現象で僕も名人戦で嫌って程経験したが、大量のカメラを背負ってシャッター音を聞いている時間は、自身の敗北を最も悔しく感じる瞬間だ。

記者たちの写真撮影がひと段落付くと僕と篠窪さんで感想戦が始まった。その内容は主に僕の仕掛けに関するところで、美濃を崩しての攻勢、構想が成立していたかに集中した。三十分ほどの検討の結果、どうやら正しく受けられれば僕の仕掛けは無理攻めらしいと結論付けられた。くっそお。有力な戦法だと思ったのに。自玉の周囲がスカスカだし、流石に反動が大きすぎたみたい。

感想戦を終え自室に戻ったところ、時刻は22時を回ったところだった。着ていた服を脱ぎ捨て、うつ伏せに布団へと倒れ込む。普段の対局より芯まで重い疲労感があった。自覚は全く無かったけど、やっぱり知らず知らずのうちにプレッシャーはかかっていたのかな。

横になると、眠気は急激に襲ってきた。顔だけ右に向け、右手でス

マホを操作して天衣に「勝った」とピースマークの絵文字を付けてメッセージを送っておく。それが体の限界だった。風呂は明日の朝でいいや、と思いつながら、僕は睡魔に身を任せた。

体を揺すられる感覚に目を覚ますと、目の前には黒のワンピースの上に白いエプロンを着た天衣の姿があった。寝ぼけた頭でスマートフォンで時間を確認すると8時。日付は棋帝戦一局目の翌々日だった。

天衣が研修会に入会してから、例会の前日からこうして僕の家泊まりに来ることが多くなった。その時は決まって僕の目覚まし時計のアラームを止められる。そして天衣に起こされた時には既に朝食が出来上がっていて、今日は焼き鮭と冷奴に大根の味噌汁だった。……段々と手の込んだものになっていってやる気がするな。

「お前、毎度ここまでしてくれなくてもいいのに」  
鮭の切り身をほぐしながら僕は言った。このイベントもそろそろ習慣になりつつある。

「やりたくてやってることだから。私の楽しみを奪わないでちょうだい」

「楽しいならいいけど。花嫁修業か何かかと思ったよ」  
「……そうね」

朝食を終えて僕の支度も済むと、家を出て将棋会館へと出発する。天衣はもちろん例会だが、僕の用事は月光先生へのタイトル戦初勝利の報告だ。

降り続く梅雨の雨も休憩か、気分の良い晴天だった。高く立ち上る雲に寄り添う太陽が、まだ夏の準備が出来ていない僕の皮膚をじりじりと焦がしていく。右手の甲で額を拭うと、じつとりと汗が滲んでいた。

「天衣、その格好で暑くないの?」

僕の左側に並ぶ天衣に声をかける。天衣の手に握られた指から、しつとりとした感触が伝わる。彼女の衣装は変わらずに黒のワン

ピースだ。こんな日に黒い服装は自殺行為だが、宿泊用に持ってきた服はこれしかないから仕方がない。

「暑いに決まってるでしょ……」

「ですよー。会館まで10分もかからないから、もう少し頑張りなげんなりした表情を見せる天衣を引つ張って歩く。高架下を潜り、いざ再度日向に出ようかというところで、天衣が僕の服の袖を引つ張ってきた。

「どうしたの？」

振り返って問いかける。天衣の頬を汗が伝って落ちるのが見えた。

「それ、貸して」

「それってどれよ」

「これ」

そう言つて摘まんだままの服の袖を引つ張られる。

「ああ、これが欲しいの。いいけど、会館着いたら返してね」

天衣が指していたのは、僕の着る白い七分袖のジャケットだった。僕としては上着を脱ぐと却って直射日光が当たつて暑くなる気がするけど、流石に天衣が気の毒なので了承を返す。青いTシャツの上から羽織つていたそれを脱いで、襟の部分を持って天衣の背後に回り、袖を通してやる。

明らかに大き目の服を纏う天衣に、こういうのもアリだなーなどと感想を心の中でだけ零す。さあ行こう、と僕が差し伸べた手を天衣が掴んだ瞬間、背後から女の子の声が飛んできた。

「ほら、やっぱり天ちゃんじゃん！ 濡の言つた通りでしょ！」

「隣に居るのつてもしかして……夜叉神八段です!?!」

「あつ、ホントだー！」

その声を聞いた瞬間、天衣はバッと僕の手を振り払いながら体ごと振り返つた。僕も遅れて回れ右するとそこには、天衣と同じ年頃の女の子が二人立っていた。

「天衣、友達？」

「え、ええ」

僕の問いに天衣は少し引き攣つた表情で答えた。



「あ、あのっ、わたし、みじゅこしみおといたします！ 天ちゃんには研修会でお世話になってます！」

短髪で、いかにも活発そうな子だった。なるほど、研修生か。確かに、天衣の大阪の友達って言ったら将棋関係くらいのもだろう。まさかこんなところで神戸の小学生のクラスメイトと出くわすことはないだろうし。というか肝心の名前を噛んでたけど、水越さんでいいのかな。

「ウチは、貞任綾乃といいますです。同じく研修会で、天ちゃん……天衣ちゃんとは仲良くさせていただけますです」

こちらは打って変わって、眼鏡でいかにも大人しそうな、まさに文学少女という出で立ち。

「天衣の兄の蒼天です。知つての通りかもしれないけど、プロ棋士やってます。これから妹をよろしくね」

僕からも名乗りを返す。雛鶴さんの時も思ったけど、ちゃんと同級生の子とも仲良くやってるようで安心する。

「漕、夜叉神先生の大ファンで……あの！ 揮毫いただいてもいいですか!！」

「ウチもお願いしますー!！」

いいよ、と了承を返すと、二人は鞆の中身を漁りだした。暫く待つと水越さんはスマートフォンとサインペンを、貞任さんは手帳を差し出してきた。

「このスマホ、裸だけどこのまま書いちゃっていいの？ ケースの上からじゃなくていい？」

「はい！ そのまま書いちゃって下さい!！」

随分と元気のいい子だな、と思いつながら銀色に林檎マークが光るスマホの裏面に揮毫する。棋士はサインを書く時に自分の名前だけでなく、自身の座右の銘や好きな言葉を一言一緒に書き記し、そのセツトのことを将棋界では揮毫と呼んでいる。元々の言葉の意味としては、単に毛筆で絵や字を書くことらしいけど。

貞任さんの手帳にも同様に揮毫し、『天衣無縫 八段 夜叉神蒼天』の文字が並ぶ。かがんで目線を二人と合わせて、揮毫入りのスマホと

手帳をそれぞれ手渡す。やったーと声を上げる二人を微笑ましく感じてみると、背後から天衣のわざとらしい咳払い。振り返るとジト目の視線とぶつかった。彼女たちの対応をしている間ずっと放置だったから、機嫌が悪いのかな。

「ほつといて悪かったよ、天衣。さ、行こうか」

そう言っただけで歩き出し、天衣へと手を差し伸べた。しかし、天衣は僕の手を取ろうとしない。あれ、珍しいな。そんなに放置されたこと怒ってる？ それとも、何か他に気に障ることしちやったのかな。僕は思案に暮れるも、心当たりは見つからない。

「天ちゃん、手繋がないの？」

声は、僕らの数メートル後ろをついてくる二人のうち、水越さんからだった。

「はあ？ 何言っているの？ 甘えたがりの子供じゃないんだから、そんなことするわけじゃないじゃない」

答える天衣に、んん？ と思ったが、隣を歩く天衣に視線で制される。とりあえずで領いてはおく。

「え、でもさつき手繋いでたよね？ 濡の見間違い？」

「ウチも手を繋いでる様に見えたです」

「見間違いでしょ」

堂々ときっぱり言い切る口調とは裏腹に、その顔は真っ赤に熟れ、口はへの字にきつく結ばれていた。その表情を見て僕の我慢は限界に達し、思わず吹き出してしまった。うん。そうだよな。こいつの事だからどうせ普段は大人びた風な態度取ってるんだろうし、それが同級生にお兄ちゃんとおてて繋いでるとこ目撃されたんだもんね！ そりゃ恥ずかしいよね！

「あー！ ほらお兄さん笑ってる！ やっぱり手繋いでたんでしょ！

ね、夜叉神先生！」

「やっぱりそうだったんです!?!」

「そんな訳ないでしょう！ ちょっと、あなたはいつまで笑っているの！ 何膝を付いているの！ ちゃんと立ちなさい！ 立って、ちゃんと否定するの！ ほら！ 立ちなさいったらー！」

## 王将

前夜祭を終えて自室に戻り、ベランダに出て外の景色を眺めていた。棋帝戦第三局の会場であるここ、ホテルネオアワジは淡路島東端の海つぺりに建つてるから、ベランダに出ると大阪湾から紀淡海峡にかけてを一望できる。対岸の阪神工業地帯の光がチカチカと瞬いているのが見えた。黒い海が揺らめきながら光を反射してなければ、宙に浮く星のようにも見えたかもしれない。

棋帝戦の第二局は、先手の篠窪棋帝の戦型志向で角換わりの将棋だった。相腰掛け銀のじりじりとした押し合いで、終盤に相手の攻めを誘って受け潰しての勝利。

これで棋帝戦は二連勝の2勝0敗になった。明日の第三局は篠窪さんからすればカド番になる。すべてのリソースを傾注して僕の対策をしてきたはずだ。僕としては勢いそのまま、三連勝のストレートで勝負を決めに行きたいところ。

ズボンのポケットから携帯電話の振動を感じて取り出すと、八一と天衣から連絡が入っていた。今震えたのは八一からのメッセージで、明日の棋帝戦のニコ生解説を八一が務めるからよろしくという内容だった。『いっぱい褒めといてね』と返信をしておく。

天衣からのメッセージは三時間前に貰ったもので、マイナビのチャレンジマッチを全勝で抜けたという報告だ。

天衣はもう、家に帰った頃かな。マイナビの会場は東京だから、移動は新幹線を使っているはずだ。欄干に肘掛けて寄りかかりながら、天衣に電話をかける。

待つこと一コールと半分で、天衣からの応答があった。

『もしもし、お兄さま?』

『もしもしお疲れ様です蒼天ですー』

『何? そのノリ』

『社会人の電話口はみんなこんな感じなんだ』

ふーん、と興味なさげに一蹴される。

『もう家着いた?』

『ええ。ほんの10分前くらいかしら』

「早かったね。僕は今ね、ホテルのベランダに出てるんだけど、海のすぐそばに建ってるから対岸の工場の灯りが良く見えて綺麗なんだ。神戸はあっちの方かな？ あとで写真送るね」

『え？ あ、いえ、そうなのね。ありがとう』

何か別の言葉をかけられるかと思っていたのか、電話越しにも戸惑いの色が見える。口角が上がっているのをバレないように声を作りながら、僕は言葉を続ける。

「そういえば前夜祭でさ、フアンの人に言われたんだ。『第二局は普通の将棋でしたね』って。ひどいよねえ？ 僕の事なんだと思ってるのさ」

『そう、ね。……雑談をするための電話だったの？』

「うん？ 僕が天衣に世間話のために電話しちやダメ？」

『そういうわけじゃ、ないんだけど……』

天衣の言葉尻が小さくなっていく。僕からのお褒めの電話を待っていたんだろう。焦らすのもここまでかな。

「冗談だよ。チャレンジマッチ突破、おめでどう。全勝だった？ す

ごいじゃないか」

『っ！ 当り前じゃない！ あの程度のレベル、何回やっても負けないわ！』

随分精神年齢が高い僕の妹だけど、褒められてはしゃいじやう所なんかは年相応に可愛らしい。いや、普段が可愛らしくないわけじゃないけど。

「そうかそうか。でも次の一斉予選はまた相手のレベルが上がるからね。油断はしないように」

『もちろんよ……だから、絶対次は見に来て』

一斉予選の応援に行く——つまり、明日の第三局に勝って棋帝戦を終わらせろということ。

プレッシャーだなあと僕が呟くと、信じてるから、と念押しがあった。妹様のためにも、明日は頑張らなきゃな。

翌日。関係者に挨拶をしながら対局室に入ると、既に篠窪さんは上座に座って瞑目していた。僕もちよつと早めに来たつもりだったのに先に入室していたつてのは、もう後がない彼の気迫の現れなのだろうか。

僕も和服の裾を気にしながら下座に着席し、手持ちの信玄袋から対局用の道具を取り出す。座布団と将棋盤の間に扇子を置き、その横、駒台の手前に懐中時計を配置する。将棋盤に向かう僕の側面に置いておいて貰ったお盆には、事前に言つて用意して貰っていた水とスポーツドリンク、そしてコップが並んでいる。

「ちと早いが駒、並べてしまふか」

立会人の清滝先生から声がかかった。清滝先生は、僕の師である月光先生の弟子で、つまり僕にとって叔父弟子に当たる人だ。プレッシャーのかかるタイトル戦で、殆ど身内と言つてもいい程近い人が立会人として見守ってくれるのは精神的に大きな助けになる気がする。

清滝先生の声に応じて、篠窪棋帝が盤の中央に置かれた駒袋へ手を伸ばし、開封する。盤上に盛られた駒の山へ篠窪さんが手を伸ばし、玉将を探しだして盤上最も自身に近い行、その中央のマスに打ちつける。ピシーンと高い音が対局室に響いた。

続いて、僕もうず高く積まれた駒の山に手を伸ばそうとしたところで、アレっと思つて手が止まる。篠窪さん、玉持ってるじゃん。

一組の将棋駒の中には、通常両対局者用にすべての駒が一對ずつ入っているが、王様の役目を果たす駒だけは“王将”“玉将”と、異なる名前の駒が含まれている。違ふのは漢字に点が一つあるかどうかだけで、動きや役割は同じだけど、対局においては上位者が王将を持つという暗黙のルールがある。今日の場合は、タイトルホルダーに僕が挑戦するという図式だから、彼が王将を持つはずだ。

盤上に手を伸ばしかけたまま固まっている僕をみて、篠窪さんは怪訝な表情。そして盤上を見回して……数秒して、あつと声を上げた。失礼、と言いながら玉将を戻し、玉将を再度盤に打ちつける。ペしつと力ない音が鳴り、彼はうつむいて耳をかく。

やめてよ、なんか、見てるこつちまで恥ずかしくなってくるじゃん……共感性羞恥ってやつだろうか。兎も角、相手は相当緊張していることが伝わってくる。僕もタイトル戦をストレートでカド番を迎えた経験があるから気持ちにはわかるけど、ここまで緊張が表に出てくると、こちらも毒気を抜かれた思いがする。

更に事件は続いた。いざ対局開始時間になっても、立会人の清滝先生が席を立ったまま帰ってこない。副立会人が呆れた顔で「彼はほつ」として始めちゃっていいでしょ」と言うので対局開始の挨拶を行う。え、ほんとに始めちゃっていいの？

清滝先生は、対局開始から5分ほど経ったのちに帰ってきた。用を足していたのか、和服がはだけた状態で。この対局、ネット中継入っているけどこの絵面大丈夫なのか……。いつまでもゴソゴソとやっている清滝先生が、気になってしょうがない。助けになっているのは気のせいだった。

集中できていないのが自分でもわかった。どうでもいいことに気が散りすぎている。対局は始まってらんだぞ、タイトルがかかった一戦なんだぞ！ 自分に気付けをして、盤面のみを気に向けるよう意識する。

先手を持つ僕の初手は角道を開ける7六歩で、対する後手も角道を開ける3四歩。続いて僕が飛車先の歩を突くと、後手も飛車先を突いてくる。篠窪さんが後手番で主力戦法としている、横歩取りの出だしだ。僕としても先後問わず横歩取りはどんとこいだ。その後数手進んで、横歩取りの戦型が確定した。

主導権を握ったのは後手の篠窪さんだった。居玉のまま左銀を前へと繰り出して、積極的な攻撃陣を築いていく。それに対して僕は金銀を左右にバランス良く配置し、相手の攻撃を迎え撃つ構えだ。堅固な守備とは言えないけど、広いスペースで玉が踏ん張れる、僕としては好みの陣形だ。

後手の角交換から、戦いの火蓋は切って落とされた。篠窪さんが右辺の飛車を左辺にひねって、飛銀桂香の攻撃陣を展開する。大砲であ

る互いの飛車が真正面に睨み合って、緊張感が高まる局面。さあどう来るかと身構えたところに、指された手は五六角。もちろん、候補としては考えていた手だ。その後の進行も用意してある。

ただ念のため、枝を広く相手の応手を読んでいく。するとその中に、一つ気になる筋が見つかった。

……あれ、ここから先攻されると、思ってたより良くならないぞ？

右辺の駒を総交換して、攻め合いになる……と思っていたが、手番は向こうで、攻めが途切れそうにない。このまま進行すると、ずっと僕が攻撃を受け続けて、逃げ切れるかどうかという戦いになりそうだ。劣勢というわけではないけど、これは僕としては面白くない。攻めている側は多少ミスを犯しても今すぐ負けるということは少ないけど、受ける方は少しのミスが一瞬で命取りになる場合も多いから。攻め合う楽しみがあるならいいけど、一方的に受け続ける展開は遠慮したいところだ。

マズイ！ 完全に読み抜けてた！ しかも攻められて良くないんじゃない、方針自体間違ってるじゃん！

盤を覗き込んで方向転換の手を必死に考えるも、中盤の入り口をくぐった今からではもう間に合わない。

30分の持ち時間を消費して、僕の選んだ手は相手の飛車を直接狙った角打ち。角の効きから避ける為、飛車は横に逃げた。対して僕は、打ったばかりの角を動かして飛車を追撃する。すると、相手の飛車は元居たマスへと帰っていき、それを見た僕も初めに打った場所へ角を戻し、再度角の睨みが飛車を捉える。そんな、飛車と角の反復横跳びが三度続いた。

——千日手。

将棋のルールにおいて、一局で同一局面が4度出現したらその対局は無効となる。それが千日手だ。公式戦の場合、30分の休憩を挟んだのち再度初めから指し直しになる。ただし、先後を逆にして。本局では模様悪しと見た僕が千日手を打診し、先手が欲しい棋帝が同意した形になる。……僕としては有利な先手を捨てさせられ、気分的には負けに等しい。

「では、30分後に篠窪棋帝先手で指し直し局を開始します。両対局者はそれまで自室にてお休みください」

立会人の言葉をうけ、自分に宛がわれた部屋へと戻る。

自室にて、バシヤバシヤと冷水で顔を洗う。水が和服に飛ぶかもしれないけど、そんなこと気にしてる場合じゃない。頭の中に燃える自分への怒り、焦りを消火し、また自分の中に残る油断や集中力の欠如を洗い流すつもりで水を被り続ける。

情けない将棋だ。初めから集中力を欠いた、気の抜けた将棋。周りの事なんて気にしている場合じゃないだろ。大事な先手をフイにして、何をやってるんだ。

幸いにして、立ち直るための時間はある。心をフラットにして、普段の精神状態を一から作り直すんだ。

気持ちの切り替えのコツは、自分の感情に意識を向けずに、五感から入ってくる情報に集中し、心を空っぽにすることだ。

一々水を掬うのが面倒になって、蛇口の下に頭を突っ込む。キーンという水道管内の水が走る音が近くで聞こえる。顔を上げると水が頬を滑り落ちて行って、顎で集まったそれが水滴になって落ちて洗面台を叩いている。段々とゆっくりになっていくその音のリズムを聞いて、ゆっくりと心が平静を取り戻していくのを感じる。

大きく腹の底から息を吐き、鏡の奥からこちらを伺う自分に行こうか、と声をかける。

タオルでざっとだけ頭と和服の肩口の水気を拭って、また大きく息を吸って、吐き出す。幸いにして、まだ次のチャンスがある。あのまま気の抜けたまま指し続けてたら、間違いなく受け間違えていただろう。僕はツイてる。やり直せる。そう自分に言い聞かせて、勝利か敗北が僕らを待つ対局室へと帰る。次にここに戻る時は、そのどちらかを背負った状態で。



## 打ち歩

髪が濡れ、和服の肩当たりを変色させて対局室へ入った僕を見て、その場に居合わせた記者や関係者がざわついた。それでも、着席するころには彼らの声も意図的にシャットアウト出来て、自分が集中できていることを確認できた。

指し直し局では千日手局の持ち時間が引き継がれる。元々4時間だった持ち時間は、両者ともに2時間強にまで消費している。プロの公式戦ではあまり見ない持ち時間だけに、時間の管理も勝負の重要なポイントになるだろう。

先後が入れ替わり、篠窪棋帝の先手で対局が始まる。篠窪さんの初手は2六歩。恐らく、得意とする角換わりを目指した初手だろう。第二局で先手の角換わりを持って負けているのに、後が無いこの場面で再度採用したってことは何か秘策があるのか。

いいよ。角交換、乗ってやろうじゃないか。互いに初期位置で睨み合っている角を、後手番の僕から交換する。——ただし、角換わりは角換わりでも、一手損角換わりだ。

一手損角換わりは不思議な戦法だ。ただでさえ先手より一手遅い後手が、更に一手分の手損をして角換わりに持ち込む。普通ならマイナスとされる手損が、特定の局面に関しては後手の選択肢を増やす効果がある。

両者とも腰掛け銀に組んで、陣形を整備する。僕は右四間飛車に構え、六筋からの集中攻撃を見せる。対して棋帝は、端から手を作っていく。

先手の飛車先の歩を交換したところで、僕に手番が回ってきた。ここで小考して、この先の展開を考える。第一感はずばり中央5五のマスに銀を押し上げる手。華々しい開戦の一手だ。対して同銀、こちらも同角として銀交換をして僕の角が盤の中央に残る。さらにここで作戦の別れに分岐して、この角をどう使うかで、この先の展開が大きく変わってくる。中央に居座って四方への睨みを活かす戦い方と、敵陣に切り飛ばして激しく攻め合うという選択肢だ。直感では切る手が

角銀交換の駒損ではあるものの、守備の要を剥がせて僕からは指しや  
すい気がする。ただ、即終盤に突入して激しい将棋になるから、持ち  
時間の少ない本局では、少し足を踏み外すと崖下に真つ逆さま。互い  
にリスクも高い展開だ。

時間がたつぷりあればじっくり考えたいところだけど、ここでは終  
盤に時間を残しておきたいから自分の感性を信じて5五銀を着手す  
る。同銀同角までは必然の手順。さあここからどうするかと脇息を  
引き寄せたところで、篠窪さんはノータイムで着手してきた。

——5六歩。僕の角取りに歩を突き出した、攻撃的な手。

棋は対話なりという言葉がある。将棋において一手一手には、何か  
しらの意味や主張が含まれている。自分は何を目指したいという手  
に対して、それを拒否する、あるいは相手の主張を認める代わりに自  
分の主張を通す、といった具合に指し手の意味を互いに咀嚼し、その  
答えを盤上で返答する。それはあたかもコミュニケーションのよう  
で、そんな様子を指した格言だ。

5六歩の意味は、僕の角が中央に居座ることを拒否する手。つまり  
必然、僕に二つあった選択肢の一つに絞られたことになる。しかも  
ノータイム指しだ。「棋は対話なり」にのっとってこの手を見ると、込  
められたメッセージは、こうだ——かかってこい。真正面から殴り  
合って、打ち負かしてやる。

盤を覗き込んでいた顔を上げた。篠窪さんも、正面から僕を見てい  
た。視線がぶつかる。彼の右の口角が不敵に上がった。おいおい、玉  
取り違えて顔真っ赤にした人間はどこに行っちゃったんだよ。3  
0分の休息で自分を取り戻したのは、僕だけではないらしい。

僕はお盆に乗るペットボトルを掴み、コップにスポーツドリンクを  
注いで一息に呷った。そして敵陣の銀将を掴み自分の駒台に置いて  
から、自身の角を持ち上げ、裏返して元銀が居た地点に叩き付ける。  
もう後戻りできない、決戦の△7七角。

——上等だ！ ぶっ潰してやる！

思えばここまで、第一局、第二局と篠窪棋帝はらしさが無い将棋を続けてきた。初の防衛戦で、タイトルホルダーとしての重圧もあったのだろう。カド番に追い込まれたこの将棋で、初めて篠窪大志という棋士と触れ合った気がした。僕と彼は、似たような棋風と評されていた。強気で、攻撃的で、殴り合いが大好物。三局目の指し直し局にして、ようやく互いの得意とする舞台が整った。さあ、思う存分殴り合おう。

先攻したのは僕だった。歩の拠点に銀を打ち込んで右の金を引かせ、更に左の金の頭に成り込むタダ捨て。相手は10分程考えてこの銀を金で取った。これで僕は銀を一枚手放したが、敵玉のボディガードである二枚の金を玉から遠ざけることに成功した。

しかし、攻守が変わって今度は僕が受けるターン。自陣に打ち込まれていた相手の銀が自玉に迫り、詰めろがかかる。篠窪さんの視線が鋭利な刃物のように僕の玉に突き刺さっている。銀の詰めろを歩で受けるが、今度は角を打ち込まれた。これも……多分詰めろだ。こちらも銀打ちで受けるも、寄るかどうか、読み切れない。歩打ち、飛車切りと詰めろの連続雨霰。完全には読み切れない中で、いつ踏み抜くかわからない地雷原を必死に駆け抜ける。頭に血が上って、顔が熱を持つているのがわかる。記録係から「残り10分です」の声がかかる。思わず心臓が跳ねたが、大丈夫、今は相手の手番。時間が10分を切ったのは、篠窪さんの方だ。

右から角、左から馬。左右から挟撃された自玉。持ち駒の銀を守りに投入するも、先手の決め手が飛んできた。僕の金、銀、飛車と三枚の駒の効きに打った、焦点の歩。読んでいた手ではあるものの、実際に撃たれると眩暈がするほどの破壊力だった。どの駒で取っても、自玉は詰む。だから取れない。放置して攻めるしかない。敵玉の近くにと金を作り、手番が巡ってきた時の攻勢に備える。ただ、それもこの苦境を乗り越えられたらの話だ。

僕の飛車を取った歩を、僕が玉で取り返す。しかし棋帝の応手は、更に厳しいものだった。僕の玉と作ったばかりのと金の間に打つ、取られたての飛車。棋士の感が告げる、濃密な死の気配。もしかしたら自

玉が寄ってるかもしれないし、そうでなくても唯一の攻め駒である借金との間にかけられた両取り。貴重な持ち時間を投入して、対応を考える。……合駒の一手に持ち駒は飛金歩の三種。飛車を合駒して両取りを解除したいけど、飛車を切られた手がまた詰めるだ。歩は論外。金が一番踏ん張れる。

相手は角と銀の交換を入れてから、飛車を引いてと金を外す順を選んだ。この手で先手の篠窪陣に僕の攻め駒が無くなり、かなり安全になった印象だ。対して後手陣は玉の居る右辺とは逆サイドに馬を作られていて、次に先手の3四馬が強烈なプレッシャーになっている。パツと見では、かなり先手優勢に見える盤面だろう。でも、この局面では僕も勝負手を用意してある！

引いた相手の飛車を追撃する、6六歩！ 飛車で取ると、王手飛車の角打ちがある。先手は飛車を逃げるしかない。敵玉の近くに拠点を築くことに成功する。これはデカイ！

攻守が入れ替わり、待ちに待った攻撃ターンだ。敵陣に飛車を打ち下ろして、次に桂馬を取る手が玉に当たってる。さあ猛攻を仕掛けるぞ、と身も心も前のめりになる。この桂取りをどう受けるんだ？ どの受け手にも料理する手があって、僕としては楽しみな局面。篠窪さんの対応次第では、寄せ切れるかもしれない。そう思っていた。

——先手の選択は、後手陣を睨む、切り札の▲3四馬。

「はっ」

思わず声が漏れた。肉を切らせて骨を断つ。あくまでも攻め合おうという、強気な一着。僕からの攻めを凌ぎきって、逆襲して詰ませてもらおうという気合の一手。なるほど確かに、僕たちは棋風が合うのかもしれない——僕でも、そうする。

なら、お望み通りをくれてやると、7七飛車成を叩きこむ。先手は二枚の銀を玉の応援に投入するも、こちらも桂馬を二枚、攻めに追加する。攻めの駒、守りの駒が総交換となり、裸になった相手玉の退路を塞ぐ角を打ち込む。7二銀以下の詰めるがかかり、先手篠窪玉に受けは無い。先手が勝つには、次に銀を打たれる前に僕の玉を詰ますしかない。

僕の玉は守りは薄いものの逃げ道が広い。ただ、先手の持ち駒は飛車、金、銀、桂二枚に歩が三枚で、詰みがあってもおかしくはない。先の折衝で、互いに持ち時間は使い果たして1分将棋になっている。詰むや、詰まざるや。さあ、最後の勝負だ。

真つ暗闇の中、道なき道を裸足で駆ける。背後から迫る追っ手に捕まったら負け。見誤って何かに躓いても負け。ゴールの方向も、そもそもゴールが存在するかも知らないまま、息を荒げてただ走る。

膨大な量の読み筋の分岐を、勘と経験を頼りに間引きして、残った枝を一心不乱に読み進める。幾重もの頓死筋を躲し必死に藻掻くも、未だ自身の死も生も見つかからない。

駒をはじいてしまわぬように、和服の袖をたくし上げて玉を上がる。両者に1分毎に下される判決が、いつ死刑宣告のそれになるか、怯えながらに指し続ける。

棋士の本能が鳴らすサイレンが、ガンガンと頭を揺さぶる。どう見たって自玉に詰みがありそうなのに、その詰み筋が見つからない。いつそ詰ませてくれたほうが楽になれるのに……つと浮かぶ弱音を頭からたたき出して、また盤上へと没我する。

自玉に群がる飛車角を合駒で凌ぐ。構うものかと強引に背後から迫る龍に追われ、自陣から玉が脱出する。すぐさま、押さえつけるように玉頭に歩が放たれる。取ったら11手の即詰み。左に躲すとして、再度歩を打たれて同玉だと詰み、同銀だと……読み切れない！時間が足りない！秒読みの59まで考えて、慌てて玉を左に避ける。背中に湿った下着が貼りついて不快感に襲われるけど、そんなこと気にしている場合じゃない。

相手の応手は、死神の鎌のように、玉の斜め後ろに絡みつく4三銀。本筋とは読んでいなかった手だった。同玉は5二角成から詰み、同金も同角成で詰み、玉上がりなら……。

その順を発見した時、閃きの光が、暗闇に慣れた目を焼き潰さんとばかりに輝いた。グツと玉が上がる5五玉を着手する。その手を見

て気が付いたか、篠窪さんは脇息に肘をついたまま頭を抱えた。

彼の選択した▲4三銀は、玉を詰ませるという意味で正解で、しかし将棋のルールとしては間違っていた。この銀打ちから続く筋を読み進めると……打ち歩詰め！ 歩を打った手で相手玉を詰ませてもならないという、将棋の反則手！ 偶然とも言える僅かの差で、先手からの猛攻を凌ぎきっていた。彼が確かに感じたであろう詰みの気配は、まるで砂漠の逃げ水のように幻と消えていく。

勝った！ 息も絶え絶えになりながら、遂に追う篠窪棋帝を振り切った。光に照らされたゴールラインまで、あと少し！

篠窪さんは力なく項垂れながらも、出来る限りの王手を続けた。もう自身に勝ちは無いと解つていながらも、タイトルホルダーとしての責務を果たすかのように。9手のやり取りの後、遂に先手の連続王手が途切れた。

篠窪棋帝、投了。棋帝戦は3勝0敗で、挑戦者のタイトル奪取となった。

終局と共に記者たちがおずおずと入室してくる。今日は、横から僕ら二人を撮影しようとする記者が一番多かった。写真撮影が終わると、終局後のインタビューが始まる。

「まずは勝利された夜叉神八段、本局の振り返りをお願いします」

棋帝戦スポンサーの新聞記者が言う。緊張の糸が切れて疲労の波に揺られる脳は、その言葉を上手く認識できなかった。数秒かけて言葉を咀嚼して、今日の将棋を思い返す。千日手局が、遠い昔のようにさえ感じた。

「千日手局は……不甲斐ない将棋になってしまいました。休憩時間に気持ちを切り替えて、指し直し局は自分らしい将棋を指せたと思います。早い内から終盤に突入する激しい将棋になって……篠窪棋帝の、凄まじい意地を見ました」

「初のタイトル獲得となりますが、感想はいかがでしょうか」

「今はただ疲れちゃって……明日ゆっくり、喜びを噛み締めようと思

います」

「ありがとうございます」

続いて質問が篠窪さんに移る。眉間に皺が寄り目は充血し、疲労からか対局前より10歳くらい老けてみえた。多分、僕もそんな見た目だろう。

「シリーズを通してのご感想をお願いします」

「一局目と二局目は良い所無しで負けてしまって、でも今日の指し直し局でようやく自分らしい将棋を指せました。結果力負けしてしまいました。最後にいい勝負が出来たので悔いは無いです」

その後も記者たちの質問に適当に答える。質問が終わると立会人から感想戦を促される。疲れたよーもう何も考えたくないよーと思っていると、表情に出っていたのか盤の向かいの篠窪さんが僕に向かって頷いた。僕も頷き返して合意が取れた僕らは、形ばかりの感想戦を手早く終わらせた。

感想戦を終えると、篠窪さんが駒を駒袋にしまっていく。タイトルホルダーとしての、最後の仕事だ。しまい終えた駒袋を中央に乗せた将棋盤を挟んで、両対局者は礼をする。ここに棋帝戦五番勝負は幕を閉じた。

## 屋敷

棋帝戦の翌日、ホテルを出るなりその足で、キャリアバックを手に祖父さんの屋敷に向かった。神戸の一等地に佇む巨大な敷地。取り囲む塀の上部には有刺鉄線が張り巡らされている。明らかにヤの付く人々の住む土地と解る景観だ。僕はその屋敷の正門を潜り、塀の中に広がる和風な庭園を飛び石に沿って進んでいく。玄関を開けて中に入ると、僕に気が付いた家人けにんが一人、駆け付けてきた。体格の良い、坊主頭にそり込みが入った男だった。

「おかえりなさいませ、若様！」

「うん、ただいま」

その呼び名にも大分慣れた。僕らが祖父さんの屋敷に引き取られてから、初め僕を「坊ちゃん」と呼ぼうとする彼らに僕は強硬に抵抗した。その結果、結局呼び名は「若様」に落ち着いた。いや、なんですよ。今の世は21世紀だよ？ その呼び方時代劇でしか聞いたことないよ。普通に名前前で呼んでくれよ。

両親が事故死して祖父に引き取られて以来、この環境には大分馴染んではきた。ただ、違和感に慣れることは無いと思う。ある日突然、厳ついおっちゃんたちから頭を下げられる立場になったんだ。家族を失った悲しみも冷めやらぬ中でめちゃくちゃ混乱したし、家から出るためにボディガードが付けられた時は正気じゃないとも思った。その精神的な揺らぎは将棋にも影響して、この時期は露骨に勝率が落ち込んだ。

その点、あつという間に適応して彼らを顎で使い出した天衣は、この頃から既に鋼鉄メンタルの片鱗が見えていたのか、それとも単に幼いから順応が早かっただけか……。僕なんかはまだ庶民の感覚が抜けないけど、天衣は完全にステレオタイプな高飛車お嬢様になってしまった。いろんな意味で。祖父さん、天衣にクレジットカードなんて持たせちゃってるからね。どう考えたって教育に良くないだろ。ちなみに高慢なことを指す高飛車の由来は将棋用語である。これ豆知識ね。



「タイトル獲得、おめでとうございます！」

「おう、ありがとう！」

男の祝福に、拳を掲げてガッツポーズで答える。

「あれ、よく知ってるね。将棋好きなんだっけ？」

言ってから、その質問に意味が無いことに気が付いた。両親が亡くなって祖父さんに引き取られた時、この屋敷の家人に将棋が出来る人が居ないか聞いて回ったから。僕の問いに、彼はふんと胸を張って答えた。

「屋敷の者皆集まって中継を観戦しましたから！ 駒の動きくらいは皆知ってますから、天衣お嬢様の解説もあって大変楽しめましたよ」

へえ、天衣が解説？ 大盤も無い中でどうやって解説したかはわからないけど、素人を相手に面白いと思わせたのは素直に凄いことだ。女流棋士になれば聞き手解説での露出も増えるだろうし、トークで活躍出来れば仕事も増えるだろう。

「見る人を楽しませるってこともプロの役目だから、使命を果たせたってことなのかな。ところで、天衣は部屋？」

「はい。ご自室にいらつしやいます」

ありがとうと礼を告げて、速足で廊下を進んでいく。途中すれ違う家人たちが「お疲れ様です！」と90度腰を折って並び、その一人一人にお疲れ様を返しつつ、まるで花道のようになった廊下を歩く。

普段なら未だ違和感が拭えないこの光景も、気が大きくなった今では有難くすら感じる。駆け足になりかけるのを抑えながら、天衣の部屋へと足を進めた。

「天衣、僕だけど。入っていいかい？」

天衣の部屋の戸に手をかけながら言った。一拍の間の後に中から声がかかると同時に戸を開き部屋に入る。

「おかえりなさい、お兄さま！」

今まで椅子に座って勉強机に向かっていたであろう天衣が、立ち上がってこちらに駆け寄ってくる。僕も天衣へと歩み寄る。天衣は僕の目で足を止めて何か言葉を発しようとしていたが、僕は構わずに勢いそのままにその小さな体を抱きしめて、感情のまま勢いよく揺さ

ぶった。

「えっなっ」

「やったぜー！ やっちゃった！ やってやったよ天衣！ タイトルだ！ 棋帝だ！ 夜叉神棋帝だぜー！」

天衣の姿を目にして、今の今まで抑えつけていた喜びが決壊して凄いい勢いで溢れ出してくる。胸の中で天衣が何かモゴモゴと言った気がしたけど、気にも留められない。

「今朝の取材でな、記者の人たちが言うんだ！ 『夜叉神棋帝』って！ すっげえ良い響きじゃない!? タイトル獲ったって実感がじわじわ効いてきてさ、僕たちの名字こんなにカッコよかったのかって感じたよね！」

「おにいさま、おちっ」

「なんかもう世界の見え方が変わったね！ 何の変哲もないホテルの朝食まで棋帝の味がすんの！ 望月の歌を詠んだ藤原道長もきつとこんな心持だったんだろうなと思っただね！ そんな事考えてたら何かオムレツが月に見えてきちゃってさ、箸入れて欠けさせるのもったいないと思っただけにいた記録係の娘にあげちゃったんだけど、結局他人にあげても欠けちゃうのは変わらないじゃん！ 自分で食べればよかったよ！ もったいねー！」

「まっつて、まっつて」

「てか棋帝ってタイトル名がちよつとアレだなって思ってたんだけどさ、だって将棋の帝王で棋帝でしょ！ なんかダサくねって思うじゃん中二かよ!? でも僕今は棋帝が一番かっこいいと思うね！ いやごめんちよつと盛ったわ流石に名人のほうがかっこよかったかも知れないけどでもどっこいどっこいかな棋帝もすげえかっこいいよね！」

「ちよつと、蒼天様何してるんですか！ お嬢様が湯で蝟みたいになっちゃいます！」

「ごめん、舞い上がってた」

「見ればわかるわ。もう、あんなに揺さぶって、首でも痛めたらどうす

るのよ」

自分でも、喜びに我を忘れるなんてことは初めてだった。棋士にとってタイトルの重さ……今まで敢えて考えてこなかったそれを、無意識の自分に突き付けられてしまった。僕の騒ぎ声を聞いて駆け付けた晶さんが止めてくれなかったら、何時までやってたんだろう……。

「晶さんもごめんね。取り乱した」

「私が言うのは差し出がましいですが、女性の体は繊細に扱っていただくと良いかと」

「申し訳ありませんでした」

そういう言い方をされると、男としては無条件降伏するしかない。

「昨日は疲れ切ってて勝利の喜びなんて感じられなかったからさ。今遅れて感情の波が来てるんだよ」

「一局目と二局目ではくれた勝利報告も無かったものね?」

「報告も何も、中継見てくれてたでしょ? 勝敗知ってるじゃん」

そもそも対局後の報告を約束していた訳でもない。

「蒼天様、お嬢様は終局後も携帯電話を握りしめて今か今かと連絡を待っておられたのです。お嬢様のお気持ちも汲んであげて下さい」

「晶! 余計な事は言わなくていいっ!」

昨日の終局は23時頃で、その後のインタビューや感想戦が終えてネット中継が終わった頃には日付が変わっていたはずだ。そんな遅い時間まで待っていてくれたのか……それは確かに、悪いことをしちやつたかな。僕は屈んで目線を合わせながら天衣の頭に手を置いて言った。

「折角待ってくれてたのに連絡してやらなくて、ごめんな」

「……別に待ってたのは私の勝手だし。疲れているのも見ていてわかってた。ただ、早くお兄さまにおめでとを言いたくて。三連勝なんて我儘を叶えてくれてありがとうって言いたくて。ただ、それだけ」

ついと顔を背けながら天衣は言った。その言葉と仕草に、胸が熱くなるのを感じた。彼女の頭に置いた手を背中へと滑り落とし、今度は

ゆっくりと抱き寄せた。

「報告が遅れたけど、タイトル、獲ったよ。約束通り三連勝だ。お兄ちゃん頑張ったから、次は天衣の番だよ。マイナビ期待してるからね」

「お兄さまがタイトルを獲ったのも、私の将棋を観に来てくれるのも、凄く嬉しい。……タイトル獲得おめでとう、お兄さま」

天衣も僕の背に手を回し……数瞬して部屋に晶さんが居ることを思い出したか抵抗を始めた。だけど天衣を偏愛する晶さんに抜け目は無く、既にスマートフォンが無音カメラアプリで幾つか写真を撮った後だった。それを消すように天衣が迫り、それに渋々従ったように見えた晶さん。しかしデータを復元したのか、バックアップを取っていたのか、後日僕の元にその時の写真データが送られてきた。いや、僕に送り付けられても要らないんだけど……。

## 着信

黒い墓石の前で瞑目し、手を合わせる。横の墓誌には先祖代々の名と戒名、そしてその末に父と母の名が刻まれている。

「父さん、母さん。昨日遂に、タイトルを手に入れたよ。棋帝のタイトルさ」

手を降ろし、目は瞑ったままで石に向かって話しかける。僕は宗教を信仰しているわけじゃなくて、この墓の下に両親が眠っているとは思ってないし、死後の世界なんてものも信じていない。両親がどこかで僕を見守ってくれているなんてことも思っていない。だから、これはただ自分のための儀式だ。僕の記憶の中の二人に語りかける。

「手強い相手だったよ。特に最後の第三局指し直し局が良い将棋だね。死力を尽くした勝負つてのは、ああいうことを言うんだろうな。最後は打ち歩詰めでギリギリ逃れてて、最後までギリギリの勝負だった」

あの最終盤は生きた心地がしなかった。今日の帰り道の中、スマートフォンアプリで棋譜を検討したらやっぱり僕の玉に詰みはあった。結果だけみると篠窪さんが詰みを逃すミスで負けたってことになるけど、一分将棋で答えがわからないまま指し続ける、人間同士だからこそ白熱した勝負だったと思う。

「本当は父さんと約束した名人で初タイトルを飾りたかったけど。まあ、一つタイトル獲って、前に進んでいる確認は出来たよ」

もし、父さんと母さんが生きてたら、この報告を喜んでくれるだろうか。そんな詮無いことを想像する。僕がプロ入りを決めた時と、どっちの方が喜んでくれたかな。連想して、その時のことを思い出す。

プロ棋士の養成機関である奨励会、その最後にして最大の壁である三段リーグの最終局。勝てばプロ入りが決まるその対局日は日曜だったから、皆家で僕からの報告を今か今かと待っていたらしい。対局を終え、吉報を届ける僕からの電話に応答したのは父さんだった。四段への昇段——つまりプロ入りを告げると、向こうの受話器の遠い

ところから母さんと天衣の歓喜の声が聞こえてきた。そして電話口の父さんはしばらく絶句したのちに、絞り出すようにおめでとう一言だけ祝いの言葉をくれた。

父さんは、僕の奨励会での成績や将棋の内容を聞いてきたことは無かった。僕もまた、父さんに奨励会の成績をあまり報告をすることは無かった。家では毎日のように将棋を指しているのに、何故かその話題はどちらも触れようとしなかった。それは、父の氣遣いだったのか、それとも他の思いがあったのか。

両親が亡くなってから、疑問に思っていたことがあった。どうして、父さんはプロ棋士を目指さなかったのだろう。ただ父さんと将棋を指すことに夢中になっていた子供の頃は考えもしなかった疑いだ。失ってから得る気付きがある、なんて俗な言葉があるけど、正しくこのことをいうのだろう。

当時、僕が父さんを相手にした勝率は7割くらいで、またプロ入り初年度のプロ相手の勝率も7割強だった。今の僕から見ても、恐らく父さんは全プロ棋士中でも中の中くらいの力はあっただろう。昔聞いた話で、父さんは将棋を覚えたのが高校生の時で、上達したころには既に奨励会の入会年齢制限を超えていたと零したことがあった。でも、奨励会以外のプロ入りルート——編入試験を受験すれば、プロ入りできる可能性は十分にあっただはずだ。なぜ、その道を選ばなかったのか。その答えを聞きたいと願う頃には、その機会は永遠に失われてしまっていた。

少しずつ大人に近づいた今なら、その答えに迫れたという感触がある。父さんは——僕たちの為に、家族のためプロの道をあきらめたのではないか。既に家族を養う身で、不安定な世界に飛び込むことは躊躇われたんじゃないか？

もし僕の想像通りだとしたら、自身の夢を諦めさせた元凶が、自身の諦めた道に行く光景を、どんな気持ちで眺めていたのだろう。いくら我が子とはいえ、素直には喜ばない気持ちがあってもおかしくないんじゃないか。

少し想像してみる。もし僕がまだプロ棋士になれていなかったと

して、今日祖父が亡くなったとする。ただ一人残った肉親である天衣を養うために奨励会を退会して就職するだろう。——いや、莫大な遺産が残るだろうから退会する必要はなさそうだな……じゃあその遺産も無いことにして——とにかく天衣の為に棋士を諦め、しかし天衣はその輝かしい道を進もうとしていたら……どんな感情になるのだろうか？ 想像しきれなかった。自分があの子に負の感情を向けるなんて、考えられない。

暫く考え込んでいると、背後から砂利を踏みしめる音が聞こえた。そしてかかる「お兄さま」と呼ぶ声。振り返るとそこに噂が連れてきた影、天衣が長い黒髪を風にたなびかせながら立っていた。

「お兄さま、携帯電話に着信来てたわよ」

え？ 電話？ なぜ僕の携帯への着信を天衣が……そう考えてズボンのポケットを探るも、無い。携帯が無い。顔を上げると、天衣が左手に赤いケースのスマートフォンを持っていた。僕の携帯電話だ。「さつき、私の部屋に携帯忘れて行ってたから。とりあえず私が出て、後で折り返すって伝えておいたわ」

「そうなんだ、ありがとう。誰からだった？」

言いながら天衣の持つそれを受取ろうと手を伸ばす。しかし天衣は携帯を持ったまま後ろ手を組んで僕から隠してしまった。その行動の意図が分からず僕が立ち尽くしていると、天衣から口を開いた。

「あの人、だれ？」

「は？」

「だから電話の相手。あの女、だれ？」

「いや知らないよ。てかさそれ僕の台詞だからね？ 誰からの電話だったんだよ」

「いいから当ててみて。心当たりくらいあるでしょう？」

唐突に始まった謎のクイズ。同世代の棋士仲間や中学高校の同級生たちなど、急に電話をかけてくる奴に心当たりがないわけではない。けどそいつらは残念なことに皆野郎だ。女性で考えられる相手という……誰だろう。

「ツツキー——月夜見坂か、もしかしたら鹿路庭さん？」

苦し紛れに上げた二人だった。月夜見坂は同い年の女流棋士で、女流玉座のタイトルホルダーでもある。供御飯と並んで古くからの仲であり、また女流の中で最も親しい相手だ。鹿路庭さんは最近よく仕事で一緒だった。ただ、この二人が直電してくる用事があるか？ タイトル獲得の祝いの言葉なら、せいぜいメールをくれる程度だろうし。というか言ってから気が付いたけど、この二人なら天衣も知っているはずだ。

「へえ、その二人が出てくるんだ」

なにやら呟いた後、天衣は携帯を返してくれた。早速着信履歴を確認すると一番上には——月光先生の秘書、男鹿さんの名前があった。

「なんだよ！ お前も知ってる人じゃないか！」

「あら、そうだったかしら？」

明後日の方向に面を向けて嘯く天衣。何のためのやり取りだったの……。男鹿さんからの電話となれば、仕事の話かも知れない。折り返し電話をかけ、スピーカーからの呼び出し音に耳を傾ける。

『もしもし、男鹿ですが』

「もしもし夜叉神です。すいません、先ほどお電話いただいたようで。連盟からの仕事の依頼でしょうか？」

『いえ、今日は個人的な電話です』

「そうだったんですか。もしかして棋帝戦の件で？」

『ええ。棋帝獲得、おめでとうございます』

「ありがとうございます」

電話を通しての会話なのに、無意識に頭を下げてしまう。

「すばらしい将棋でしたね。特に第三局、今年度の名局賞有力候補と言っている大熱戦でした」

「ありがとうございます！」

再度頭を下げる。携帯を耳に当てながらぺこぺこしている僕に、天衣が胡乱げな目を向けている。いや、お前も仕事で電話使うようになったらわかるから。無意識でやっちゃうから。

『会長からも伝言を承っています』

「月光先生から」



月光先生とは次の順位戦の対局で当たることになっている。棋士は対局が近い相手とは距離を置きたがる。月光先生も僕と直接話するのは味が悪いと思ったか、伝言という形をとったんだろう。僕は特に気にしないんだけどな。

『お伝えします』

「お願いします」

『棋帝獲得、おめでとうございます。しかしそれとは別として、”夜叉神棋帝”の初陣では私が勝たせていただきますのでご容赦を——とおっしゃっていました』

「なるほど。では僕からも。次こそ恩返しさせていただきますとお伝えください」

『承りました。会長も相当気合が入っている様子です。好勝負を期待していますよ』

「ありがとうございます」

失礼しますと最後に一礼して、相手から電話を切ったことを確認してから電話をポケットに仕舞う。いつの間にか僕の右隣に立っていた天衣に顔を向けると、僕を見上げる天衣と視線がぶつかった。あからさまに眉を顰めてみせるが、彼女は可愛らしく小首を傾げるだけでどこ吹く風。仕方ない、こいつが僕に対してやたら悪戯好きなのはいつもの事か……。小さく息をついて、「戻って将棋指すか」と促すと、天衣は良い笑顔で頷いた。

## 共に東京へ

脳内の将棋盤・駒を使った研究に一区切りつけると、深く集中して外界と隔絶されていた意識が浮上する。座っているシートの感触、車内の匂いと振動、左肩にかかる体温と重さ。切断されていた五感から莫大な情報が脳に流入してきて、現状の把握に少しばかり時間が必要だった。左隣の席に目を向けると、僕の肩に頭を預けて眠る天衣の姿と、物凄い速さで後方に流れていく車窓からの景色が見えて、東京へと向かう新幹線の車内に居ることを思い出す。

今日は八月一日、天衣の出場するマイナビ一斉予選の当日だ。一斉予選とチャレンジマッチは同じ会場で行われるため、再度新幹線で東京への遠征になる。二つ並びのシートの窓側に天衣を座らせて、僕は通路側。搭乗当初は雑談なんかしていたけど、十数分したら天衣が眠っちゃって、一人残された僕は脳内将棋で研究をしていたんだ。

ある程度棋力が養われると、脳内に盤駒がくつきりと浮かぶようになって、自由に動かせるようになる。プロ棋士の中には、対局以外で殆ど駒を触らないなんて人もいるらしい。将棋の勉強は全部頭の中の盤駒で済ませちゃうんだって。僕も研究では物理的に駒を動かさない分楽で速いから脳内で済ませるけど、棋譜並べや検討なんかは実物の駒を使う。やっぱり視覚的な補助があると脳のリソースを全部思考に費やせるし、見落としも少なくなる。プロがイベントでよくやる目隠し将棋なんてのもあるけど、やっぱり将棋のクオリティは落ちちゃうよね。

腕時計で時間を確認すると、東京駅到着まであと5分程。天衣の肩を軽く揺すって起こしてやると、パツと寝覚めよく目を覚ましてくれた。先ほどの僕と同様に状況がつかめていないのか、大きな目をきよろきよろと動かして周囲を見回し、最後にじつと僕を見上げてきた。その向けられた黒目に、目尻を下げた表情の僕が映り込んでいるのが見えた。

「おはよう。もうすぐ東京駅だから、降りる支度しな」

「うん……寝ぐせとか、ついてない?」

「ちよつと後ろが跳ねてるかな。どれ、整えてやろうか」

僕の言葉に、天衣は頷いて正面から頭を差し出し、軽く握った両手は体を支えるように僕の胸に置いた。いや、僕としては後ろを向いてくれた方がやり易かったんだけど。天衣の背中から手を回して跳ねた髪の毛を撫でる僕の姿は、見る人によっては抱き合っているようにも映るかもしれない。

すると指を滑る髪の毛の感触を手櫛で楽しむ。本人に似ず素直な髪質のそれらは、一撫でするだけで僕の思い通りに頭を垂れてくれる。一通り整え終わった後も手慰みに数回頭を撫でて、その後天衣のトレードマークの赤いリボンを三か所に結んでやる。ただ、そこまでしても、天衣の姿勢は変わらなかった。

「はい、直ったよ。……おい、大丈夫？ そんなに眠い？」

「ううん、大丈夫。……もうちよつと、このまま」

『間もなく、東京駅』とアナウンスが流れるまで、天衣はその態勢のままだった。そんな眠いのかと僕は新幹線に乗る前に買ったペットボトルのコーヒーを差し出すが、天衣は首を横に振る。立てるか？ という問いにも、首を横に振った。仕方ないか、と僕は伸びをして長時間座りっぱなしだった体をほぐすと、右手にバックを、左手に天衣の手を握って席から立ち上がった。

今日の対局場であるパレスサイドビルは、通常東京駅から地下鉄に乗り継いで向かうけど、今日は寝起きの天衣のための運動と観光も兼ねて徒歩で向かうことにした。東京駅から皇居のお堀に沿って反時計回りに進むと、20分程で到着する距離だ。

空は薄い雲が日を遮って、カラッとした穏やかな風が吹いて過ぎやすい朝だった。皇居ランナーたちに混じって、堀沿いを歩いて行く。藻か水草か、堀の水は緑に濁って見えた。堀の先には石垣が立ち上り、櫓や城門など今も残る城としての名残に、歴史好きの天衣は興味深そうに辺りを見回している。先ほどまで席も立とうとしなかった様子も何処へやら。

「でも、よくこんな残しているわね？　今の時代なんにも役に立たないし、維持するのも大変でしょうに」

「こうやって観光資源になってるからいいんじゃない？　歴史的建造物なんだしさ」

「皇居って、元は江戸城でしょう？　ということは、徳川の城つてことよね」

「そうなるね。豊臣に関東転封を命じられてからだから、家康にとつては割と晩年になってからではあるけど」

興味津々という様子から一転、忌々しげに徳川の名を出した天衣。こいつは何に影響を受けたのか、極度の徳川嫌いになってしまった。これから学校で歴史の授業が始まったら、どんな気持ちで江戸時代当たりの授業を受けるんだろう。ずっと今みたいに眉間にしわ寄せてるのかな。ちよつと気になるかも。

「江戸城って、徳川家康が建てたんじゃないの？」

「江戸城を築城したのは太田道灌って人だね」

「太田道灌？　誰？　その人も大名なの？」

「いや、扇谷上杉っていう、この辺を領有してた大名家の家臣だよ。道灌はその家宰……大名に代わって政治を取り仕切ってて、その仕事の一環で江戸に城を建てたと。で、戦乱の中北条豊臣の手に渡って、最終的に徳川に与えられたって流れかな」

「へえ。ところでその扇谷上杉って、上杉謙信の上杉？」

「その上杉とはちよつと違うんだな。謙信は山内上杉つてところに養子に入っただけで、扇谷はその山内の分家、なのかな？　僕もあんまり詳しくないんだけど、上杉家が代々引き継いでた関東管領って役職を巡って争ったりしてて、割と仲は悪いイメージがあるかな」

「同じ一族なのに、争うのね」

「そりゃ、一族どころか親子や兄弟で殺し合うことだつて歴史上の日常茶飯事さ。良かったよね平和な時代に生まれて。もし僕たち兄妹で戦うなんてことになったらどうするよ？」

「どうするものにも、しよつちゆう戦つてるじゃない。将棋で」

「確かに。そういえば将棋って戦争のゲームだったね」

兄妹で他愛のない会話が弾む、のんびりと時間が流れる朝だった。もうすぐ天衣が勝負の世界に身を投じるということを忘れそうなほど。対局に際して、リラックスした精神状態で臨めるのはとてもプラスに働く。時折すぐ近くを追い抜いていく名も知らないランナーたちに急かされた気分になりながらも、僕は努めてゆったりと歩を進めた。天衣にとって心安らぐ時間が、少しでも長く続くように。

## プロとスポンサー

「いやあ……これはこれは」

「何これ？ 私とあいの名前に沢山シール貼ってあるけど」

対局が行われる、ビルの二階イベント会場に着くと、僕らを出迎えてくれたのはマイナビ恒例となっている個人スポンサー数を示すボードだった。参加者の名前の横に、対局者に懸けられた懸賞の数を表すシールが貼ってあって……天衣と雛鶴さん、この二人だけ飛びぬけた量のシールが貼られていた。二人に次ぐ三番手の鹿路庭さんが20個弱であるのに対して、二人はその十倍程の数はありそうだった。

「個人スポンサーの数だよ。お金を払って、お前の対局を近くで見たり対局後に写真撮ったりしたいファンの人の数」

「女流が外に媚びを売る仕事だってことはわかってたけど、そんなことまでするのね」

うんざりしたような表情をして、天衣は吐き捨てるように言った。ただ一人として四段——プロ棋士が生まれていない女性を、将棋普及のためにプロ棋士とは別枠で将棋界に取り入れようという目的で作られたのが女流棋士というシステムだ。その背景から、女流に真に必要な能力は将棋の強さではなく容姿や愛嬌、聞き手の上手さやイベントでのトーク力だと、そう考える人は残念ながら少なからず居る。女流棋士の存在意義は客寄せパンダだと。でも、前提として、将棋を指すという行為が何も生産しないのはプロである僕たちだって変わらないはずだ。だから、外部の人たちから「金を出してもいい」と思わせることがプロと女流で変わらない存在意義であることは間違いないはずで、将棋の強さや勝ち星だけがこの世界の住人の価値ではないと僕は思っている。棋士の価値が強さだけなのはその通りだと思うけど。

「将棋が職業として社会に認められて、僕たちが対局料を貰えるのも将棋界の外の人たちのおかげだよ」

将棋は他のプロ競技、例えば野球なんかと違って、試合に当たる対

局を自前で開催しているわけじゃない。給料も所属組織から出ているわけでもない。ほぼ全ての棋戦がスポンサーによつて主催されていて、棋士の収入もその対局料やイベント出演料に依存するから、スポンサーが撤退してしまつたらもう僕たちは店を畳むしかない。そしてスポンサードする企業側からすれば、お金を出す価値は対象の人氣や注目の多寡によつて増減する。つまり、ファンの多さだ。

「だから、スポンサーやお金を落としてくれるファンに支えてもらつて僕たちは将棋が指せるんだ。特に今日みたいなファンとの距離が近いイベントは、ファンからすれば貴重な棋士との交流の機会だから、あんまり邪険にしないこと。それが自分の居場所を守ることに繋がるからね」

僕の話に、天衣は小さく頷いた。多分、お金が絡んだ文字通り大人の事情は、小学生のこの子には難しいだろう。今はまだ、ファンとスポンサーを大事にしろつてことだけ伝わればいい。

「まあとにかく、今日は対局のおまけにファンとの写真撮影があるとだけ分かつていればいい。僕たち将棋を仕事にしている人間にとつて、ファンサービスや人気取りも大切な仕事の一つだから、ちゃんと愛想よくするんだよ」

「う……わかつたわよ」

対局者控室に向かう天衣を見送つてから、僕も一般客用の受付へと向かう。受付は、ファンの人たちが長蛇の列を作っていた。今並んでいる人だけでも、ざつと100人は居るだろう。女流棋戦の予選つて、こんなに人入るの？ プロ一般棋戦の毎日杯も準決勝から公開対局だけど、ここまでの人は居なかつた。すごいと思わず口に出しつつ列の最後尾に並ぶと流石に将棋ファンは目敏くて即時身バレし、騒ぎを聞きつけたスタッフに関係者用の控室に移された。

「お忙しいところ騒がしくしてすいません」

「いえいえ、むしろこちらから棋帝にお礼申し上げたいくらいですよ！ あんなに若くてスター性抜群のお弟子さんをウチでデビューさ

せて下さるなんて！」

控室へと歩く廊下で、黒いスーツに身を包んだスタッフさんは大仰な手ぶりをつけて話し出した。

「ほんと、九頭竜先生と夜叉神先生には頭が上がりません！ お二人のお弟子さんのおかげで集客数が倍増じや済まないくらいですよ！」  
「シールもいっぱい貼ってありましたねえ。あれ、きつと多いんですよ？。」

「最高記録を10倍近く更新しています」

「おいおい将棋ファン大丈夫か」

9歳の女の子に殺到して写真撮りたがるファン層ってどうなのよ？ いや、考えてみれば既に女子中学生の銀子ちゃんが将棋界一番人気の時点で結構似たようなもんか……。若い方が良いつて言っても限度があるでしょ。さつき天衣にファンを大事にしろつて言った手前アレだけど、女流棋士を何か別の職業と勘違いしてないか？

「こちら控室になります。自由にお使いいただいて結構ですから」  
「ありがとうございます」

ドアの前まで案内されて、とりあえずノックをして扉を開ける。中には長机とそれに沿ってパイプ椅子が並んでいて、右奥の机に二人、見知った顔が隣り合って座っていた。明らかに対局用とは違う、仕立てのよさそうな黒いストライプのスーツに身を包んだ八一と、紺色のセーラー服に青みがかった白髪が映える銀子ちゃん。何か二人で会話をしていたようだけど、僕が入ってきたことに気が付いた八一が右手を挙げ、銀子ちゃんが続いて会釈をする。僕はふらふらと左手を振って「おはよー」と返答し、彼らが座る位置の対面に座った。

この面子で顔を合わせるのは久しぶりだった。八一とは今も研究会が続いてるし、銀子ちゃんとも会館で会えば話したり将棋を指したりもする。けどそれぞれが今はトップ棋士として活動しているからか、なかなか三人でエンカウトすることは少なくなった。昔……修行時代はよく僕が清滝先生宅にお邪魔して、三人で負け抜けて指したりしたんだけどな。偶に関東から同級生の歩夢も来てたっけ。

「おう蒼天、棋帝獲得おめつとさん」



「おめでとう蒼天くん。第三局、凄い将棋だったわね？」

「ありがとう二人とも。第三局、結構評判良いみたいなんだよね。男鹿さんからも言われたよ」

「そりやそうだろ。意地と意地のぶつかり合いって感じで、お互い一步も引かずに殴り合ってたからな。ニコ生も凄い盛り上がりだったぞ？」

ニコ生で解説を担当していた八一が言う。その言葉そのものは嬉しかった。ファンに喜んでもらえる派手な将棋を指すことは、常に念頭に置いていることだから。ただそれを聞いて、僕としては八一に思うところがあつたことを思い出した。

「でもその割に、ニコ生中継で一番盛り上がった瞬間は対局関係ないシーンだったらしいね？ 何か心当たりがあるんじゃないかな八一くん？」

「やべ墓穴掘った!？」

「ロリコンキモ……頓死すればいいのに」

棋帝戦の翌日、天衣と指導対局しながら八一が解説を務めたニコ生中継をタイムシフト視聴していると、衝撃の光景が目飛び込んできた。どこからか現れた欧米系の幼女が、八一の頬に口づけをしていた。思わずほえーと口をついて声が出た。画面を映像が見えない程度の数のコメントが覆い、将棋中継史上類を見ない祭りになった。後で棋帝戦でネット検索をかけると、悲しいことに上位に並んだのは殆ど八一絡みのサイトだった。僕の記念すべき初タイトルのはずなのに、他ならぬ八一によってサジェスト汚染を受ける羽目になってしまったのである。この恨みは当分忘れないだろう。少なくとも今後10年は解説やイベントでのトークの持ちネタとして使ってやろうと決意を固くしている。

「そ、それより！ 蒼天は今日来られて良かったな！ 天衣ちゃんに棋帝戦ストレート勝ちして応援に行くって約束したんだろ？ 良かったな！」

「ん？ なんて八一がそれ知ってんの？」

「前に天衣ちゃんがウチに来た時に聞いたんだ。ニコ生解説の話のネ

夕になるかと思つて」

「えつ？ 天衣がお前んち行つたの？ 何で？」

「あいがよく研修会の帰りに連れてくるんだ。他にも何人か年の近い女の子も居て、皆で楽しそうに将棋指してるよ」

「他にも何人か……？ お前真性かよ」

「ちよつと！ 連れてきてるの俺じゃないから！」

他にちゃんとした目的があるとはいえ、妹が男の家に入り浸つていくというのは兄として複雑な心持である。しかも初めはブラツクジョークの類として聞いていた九頭竜ロリコン説も、最近物的証拠が着々とそろいつつあるように見えてきた。兄として、警戒心を強めない訳にはいかない。

「蒼天くん、妹さんにちゃんと言つておかなきゃダメよ？ 不審者の住む家には近づくなつて」

「俺の身元は将棋連盟が保証してくれるからね？ れっきとした竜王だからね？ 不審じゃないよ？」

「八一、お前僕の妹に変なことしたら命は無いと思えよ」

「しねえよ！」

「他の子に対しても、本人の合意があつても条例ではアウトだからね？ 現役タイトルホルダーが逮捕なんてやめてね？」

「ロリコンキモ……頓死すればいいのに」

「だからロリコンじゃねーから！」

ちなみに、天衣に手を出したら命が無くなるのは高確率で真実であろう。うちの妹はヤクザの姫状態なので、万が一があればチャカ持った怖い人たちが総力を挙げて復讐に動くだろう。さもありません。

「ところで、八一は仕事で来てるんだろうけど、銀子ちゃんはどうしたの？ 女王戦に向けての視察？」

八一の抵抗も虚しく、九頭竜八一ロリコン説に一定の決着がついたところで（僕は冗談の範囲内だと一応まだ思っている。僕は）、この控室に入った時からの疑問を切り出した。

八一はスーツを着ているから仕事だろうと察しはつく。対して銀

子ちゃんはセーラー服。中学生にとって制服は正装、つまり銀子ちゃんも仕事で来たんだ！ と考えるのは早計である。なぜなら銀子ちゃんは公私問わず外出時は殆どセーラー服だから。よって服装で仕事かプライベートかを見分けることが難しい。彼女はこの棋戦のタイトル、女王の保持者であるから自分への挑戦者を選抜する予選を観に来たのかとも思ったが、ぶっちゃけ彼女の實力は女流の中では飛びぬけている。視察なんかいらないだろう。僕の疑問に、銀子ちゃんに代わって八一が答えた。

「今日は大盤解説の仕事だよ。俺が解説、姉弟子聞き手で仕事が入ったんだ」

「えっ、銀子ちゃんが聞き手やるの？ 女王なのに？ そんなことある？」

二人の口から発せられた驚きの言葉に、思わず声のトーンが上ずった。マイナビが主催する棋戦で、そのタイトルホルダーが聞き手をするなんてことある？ 解説役がその名の通りその将棋の解説、説明をするのに対し、聞き手は解説が上手くその仕事を出来るように導く誘導役だ。つまり畢竟、聞き手より解説の方が立場は上になる。いくら相手が竜王とはいえ、自社のタイトルホルダーを聞き手で起用するなんて、にわかには信じられなかった。

僕の言葉に確かに、と頷いた八一が「姉弟子何か聞いてないんですか？」と聞くと、銀子ちゃんはつらつらと何事かへの言い訳を長々続けながら「解説の依頼が来たからついでに弟子の応援で現地に駆け付けるであろう八一を推薦した」という旨を話し、最後に早口で「寂しく誕生日を過ごすであろう弟弟子に仕事をプレゼントしてやろうって気持ちも無きにしも非ずですけど？」と続けた。その言葉を聞いて、本日八月一日が八一の誕生日であることを思い出し、そして大盤解説の歪なキャスティングの理由にも得心がいった。そして同時にその素直じゃない感情表現に既視感でんこ盛りな僕は思わず吹き出し、銀子ちゃんから冷やかな視線をいただくことになった。

「あれ？ でも、蒼天も弟子が出演してるじゃないですか。だったら俺より蒼天を呼んだ方がファンも喜ぶんじゃないですか？ 人気は

俺より蒼天の方が上っぽいし」

「いや僕は棋帝戦の最中かも知れなかったし。つーかお前、今の話聞いて意図が分からないわけ？ 相つ変わらずにぶちんだなあ」

「いいのよ蒼天くん。このバカがバカなのは昔からだから。むしろバカがいつも通りバカで安心するわ」

「ちよつと二人して何に怒ってるんですか……」

その数分後、解説開始をスタッフが告げに来るまで僕らの八一弄りは続いた。その声を聞いて水を得た魚のようにこの部屋を脱出した八一。控室に残された銀子ちゃんの右肩を叩き、「あいつはあんなにだけドストレートに表現すればちゃんと伝わるから。頑張るんだよ」と心からの応援を送った。銀子ちゃんは小さくため息を吐いたのち、疲れたような顔で頷いた。